

大学生が
自分の未来
静岡県の未来を
真剣に考え

大学生が創る未来への羅針盤 政策提言



平成29年3月
静岡県



INDEX

目次

■静岡大学 人文社会科学部 理論経済学研究室 大学生による未来へのかけ橋創造プロジェクト	03
■静岡県立大学 国際関係学部 犬塚ゼミ 私たちが作り出すライフデザイン・プロジェクト事業 ～ジェンダーに縛られない子育て社会を目指して～	09
■常葉大学 法学部 エリア・デザイン研究会 若者の将来にとって魅力的なまちづくり ～「ワークとライフのワンストップ・カフェ」の実践を通じて	16
■静岡英和学院大学 人間社会学部 永田ゼミ 保育者をめざす学生たちが安心して子どもを産み育てられるために ～先輩保育士のライフデザインから学ぶ～	24
■静岡福祉大学 社会福祉学部 西尾ゼミ 私の子どもたちがふるさとと思える静岡をつくるプロジェクト	33
■静岡産業大学 経営学部 菊野ゼミ 思いやりマインドを持った恋愛(Sympathizing Love)検定: より豊かな家族・地域・夫婦・子育てを目指して	40
■浜松学院大学 浜学少子化突破戦略研究チーム “ふじのくにづくり”夢の羅針盤プロジェクト事業	46

大学生が創る未来への羅針盤 政策提言

大学生による未来へのかけ橋創造プロジェクト	
静岡大学 人文社会科学部 経済学科 理論経済学研究室	
参加学生	齋藤 清高 羽儀 翔平 増田 研佑 大谷 凌平 青山葉瑠香 荒木菜々子 立木 晶 鳴嶋 一透 片山 千太郎 松浦 実花 早川 彩乃 良知 将太 上野 一心 橋 宏昌 新屋 徹 遠山 一輝 堀内 亮平 佐藤 悠紀 堀 修也
指導教員	山下 隆之 (理論経済学)、上藤 一郎 (経済統計学)

1 目的

静岡県が2016年度に分析した「ふじのくに少子化突破戦略の羅針盤」(以下、羅針盤)を出発点とし、少子化現象の背後にある原因を探り、その対策に関する研究を行う。研究成果はシンポジウムにて報告を行うが、参加者との意見交換をフィードバックさせることで研究をさらに精緻化させるとともに、少子化問題への理解と関心を高め、将来の結婚や子育てを軸とするライフデザインを考えていく。

2 実施内容

本研究チームが「羅針盤」報告書の中で注目したのは、市町別の合計特殊出生率の要因分析において、地域差の大部分が結婚要因で説明できるとする分析結果であった。静岡県の婚姻件数は減少傾向にあり、その原因の解明が急務であると考えられるからである。このため、結婚に関する経済分析を山下隆之ゼミナール(理論経済学)が進め、大学生が結婚に抱く意識を上藤一郎ゼミナール(経済統計学)がアンケート調査から明らかにするという形で共同研究を進めることとなった。

研究成果は順次公開することとし、研究発表とそれを巡る討論会を学内と学外とで計2回行った。学内シンポジウム(2016年11月24日)が静岡新聞で報道されたことが契機となり、学外シンポジウム(2017年1月9日)は静岡第一テレビと静岡朝日テレビの取材を受けた。学外シンポジウムでは、国立社会保障・人口問題研究所から少子化問題の専門家である守泉理恵氏に基調講演をお願いすることができた。静岡朝日テレビからはさらに大学での独自取材も受けた(2017年1月26日)。

また、長泉町役場(2016年12月26日)と伊豆市役所(2017年2月2日)へのヒアリング調査を行わせて頂いた。少子化問題の地域差を確認させられるとともに、統計資料には表れてこない課題を知ることができた。

グランシップでのシンポジウム (2017年1月9日)



長泉町へのヒアリング調査 (2016年12月26日)



3 分析

3.1 静岡県における婚姻の分析

結婚は愛情によって夫婦関係が結ばれるのが理想である。しかし、他の要因も考慮して結婚する人も多いだろう。家事サービスの分業やリスクシェアなどを挙げることができるが、男女の間では重視するものも異なる。男性はパートナーに知性や教育を求める傾向が強く、女性は収入を求める傾向が強いとする研究がある。経済学では、収入を重要な指標と考えることが多い。

女性の結婚行動を収入面から分析する手法としてベッカーモデルと乗り換えモデルがある。ベッカーモデルでは女性が一人暮らしをしていると仮定し、結婚が男女の賃金比に影響されていると考える。乗り換えモデルでは女性が親と同居していると仮定し、父親と夫候補の賃金比の影響が結婚にどう影響しているかを見る。静岡県における結婚がいずれによるものかを知るために回帰分析を行った。回帰式は次のようになる。

$$Y = \alpha + \beta(X_1) + \gamma(X_2) + dummy$$

女性の賃金
夫候補の賃金

父親年齢層の賃金
夫候補の賃金

Y : 初婚率、 α : 定数、 β : ベッカーモデルの係数、 X_1 : 男女の賃金比、
 γ : 乗り換えモデルの係数、 X_2 : 男性の年齢層別賃金比

1995年から2015年の静岡県における男女年齢階層別賃金(きまって支給する現金給与額)、年齢階層別女性の人口及び初婚件数のデータを用いた。この分析において X_1 、 X_2 が1を超える場合、初婚率に大きなマイナスの影響が出ると考えられる。前者は女性の賃金が男性の賃金よりも高いため、結婚は魅力的ではないかもしれない。後者は父親の賃金が夫候補の賃金よりも高いため女性は結婚をためらうかもしれない。回帰分析から、女性の結婚行動には年齢階層別の違いが見られた(表1)。

表1 婚姻のパターン

	男性：20～24歳	男性：25～29歳	男性：30～34歳
女性：20～24歳			○
女性：25～29歳		◎	
女性：30～34歳			○

女性の20代前半、30代前半ではベッカーモデルが当てはまり、20代後半では乗り換えモデルが当てはまった。20代前半の女性は10歳以上年上の男性と結婚し、30代前半の女性は同世代の男性と結婚する傾向がある。この組み合わせの世帯年収を賃金構造基本統計調査から推計すると655万円（20代前半）から700万円（30代前半）となる。女性が結婚を決意するにあたっては、ある程度の理想とする世帯年収を考慮しているものと考えられる。ベッカーモデルでは婚姻のパターンに二極化が生じており、女性が理想とする世帯年収に近づくためには、年上の男性と結婚するか、あるいは仕事を優先させ30代前半になって結婚をする晩婚化のいずれかを選択している結果となっている。これに対し、20代後半の女性は同世代の男性と結婚をしている。しかし、この組み合わせは世帯年収が理想とする額より低い（611万円）。このことから考えられるのは、父親から何らかの形で経済的支援を受け不足部分を補っているために、理想とする世帯年収に届かなくても結婚しているものと推測される。

3.2 女性の県外流出の分析

婚姻数を増加させるためには、人口数も検討する必要がある。近年、静岡県では、20代女性の県外流出が深刻となっている。人口移動の要因としては、進学と就職が考えられるが、女性は県外への進学後にそのまま県外で就職をしてしまう傾向にあり、それが女性人口の減少として表れているようだ。結婚適齢期人口の男女比がアンバランスであれば、そもそもパートナーに巡り合うことが困難である。県外流出の原因を探るため、女性就業者に関してシフト・シェア分析を行った。

シフト・シェア分析は、地域の成長を全国成長要因、地域特殊要因、産業構造要因の3要因に分解する手法である。地域の成長要因が、成長産業や衰退産業といった産業構造によるものなのか、産業構造以外の地域的な特徴によるものなのかを知ることができる。本研究では、国勢調査より求めた47都道府県の女性就業者数成長率（20～24歳）を産業別の成長率寄与度に分解して分析を行った。結果は、静岡県では産業構造要因がマイナス、地域特殊要因がプラスとなった。マイナスである産業構造要因を産業別に分解すると、飲食・宿泊業はプラス、サービス業、卸売・小売業、製造業、医療・福祉業はマイナスとなった。

次に女性就業者数と女性人口との関係を確認するために、全国を対象として重回帰分析を行った。製造業、卸売・小売業、医療・福祉業における女性就業者数が増加するほど、その地域の女性人口は増加し、金融・保険業、公務（他に分類されないもの）における女

性就業者数が増加するほど、女性人口は減少する傾向にあることがわかった。静岡県では、製造業、卸売・小売業、医療・福祉業の女性就業者数（20～24歳）が減少しており、金融・保険業では増加している。これは回帰分析の結果を裏付けており、静岡県では女性の人口増加をもたらす産業への就業者が少ないことが問題だと言える。20～24歳の女性の場合、製造業、卸売・小売業、医療・福祉業での就業者数を増やすことで、人口増加、人口減少の抑制につながると考えられる。

3.3 アンケート分析

結婚や子育てに関する大学生の意識調査を行うため、シンポジウムではアンケート調査を行った。2月14日現在120名の回答を得ている。回答者は、男性が72名、女性が48名である。県内出身者は69名、県外出身者は51名という内訳となっている。さらに細かく見ると、県内出身者のうち最も多かったのは県中部地方出身者で、特に静岡市が多い。

就職先の希望であるが、回答者の57%が地元での就職を希望しており、地元以外を希望する例としては東京都や愛知県など近隣の大都市が挙がっていた。静岡県内を希望する県外出身者もあった。業種の希望は、静岡大学の人文社会科学部や静岡福祉大学の学生に多く答えてもらったということもあり、公務やサービス業の希望者が多く見られた。

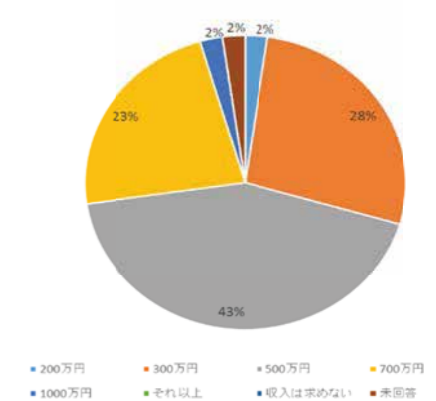
次に結婚の希望についての結果である。結婚を希望する人は83%にも上り、多くの学生が結婚を希望していることがわかる。また、理想の初婚年齢は20代前半が10%、20代後半が51%、30代前半が34%であり、9割以上の人が30代前半までに結婚をしたいという回答であった。

上記の回答は男女ともにほとんど同じ割合であったが、「結婚相手に求める最低年収」は男女で大きく異なる結果となった。男性は女性に対して300万円が61%、500万円が22%となったが、女性は男性に対して300万円が28%、500万円が43%、700万円が23%という結果となり、女性の方が男性に対して多くの収入を求めていることがわかった。

続いて、理想の子ども数に関する回答である。大学生が理想とする子どもの数は、1人が11%、2人が62%、3人が18%などとなっていて、2人または3人を希望する人が80%を占めた。

2015年の静岡県の合計特殊出生率は1.54であり、もしもこの理想が実現できれば、出生率は大幅に改善されると見込まれる。しかし、理想の子ども数を実現するために必要であると考えている世帯年収は、500万円が20%、700万円が42%、1000万円が31%と、かなり多くの年収が必要だと考えている人が多い。

図1 女性が男性に求める最低年収



3. 4 ヒアリング調査

「羅針盤」における合計特殊出生率の分布において特徴のある2つの市町を訪問してヒアリング調査を行った。

長泉町は、人口増加率、合計特殊出生率が県内1位、婚姻率が県内2位である。長泉町の主要産業は、製造業、卸売・小売業である。児童数は、1989年～1996年までは減少傾向にあったが、1996年～2004年をターニングポイントとし、その後は増加傾向にある。長泉町の子育て支援事業は、子育て支援から始めたのではなく、子育て世代の経済的支援から始めた点が特徴的であり、短期的な成果重視の事業を行っている。一方で、結婚支援事業は行っていない。長泉町に住む利点としては、立地的要因、医療・子育て支援が挙げられる。

今後の課題としては、持続的な発展に向けたコミュニティ作りや、ファミリーサポートセンターの子どもを預けたい人と預かりたい人の、需給のミスマッチの改善、女性の労働率の回復が挙げられる。女性の労働率は県内ワースト1位である。

伊豆市では、県全体の人口が減少に転じるよりも前から人口減少が続いてきた。伊豆市における人口流出の特徴として、県外よりも近隣市町への社会移動が多いことが挙げられる。転出の大半を占めるのは15歳から30代前半までの年齢層であり、このことが婚姻率や出生率の低下にもつながっている。

調査でわかったこととは、伊豆市は子育て支援事業の充実だけでなく、都市計画の見直しを重要な人口対策の一環として位置付けていることである。これまで行ってきた駅周辺への住宅建築制限の見直しと、「文教ガーデンシティ構想」という新たな都市計画を予定している。子育て機能の集約による負担の軽減に加え、伊豆市独自の教育環境の整備により、市内外からの子育て世代の定住促進が期待される。

産業面では、主要産業である観光業と農業を組み合わせる新たな産業の創出を目指すほか、若者からの需要が見込めるIT関連企業の誘致を行い、産業の強化と雇用の増加を狙う。既に実施されている、市外から移住した若者への住宅新築補助金交付事業と合わせて、産業面でも子育て世代の移住・定住促進が期待される。以上をまとめると、表2のようになる。

表2 少子化対策

事業内容	長泉町	伊豆市
保育費補助	○	○
医療費補助	○	○
放課後保育	○	○
不妊治療	○	○
定住支援	県外進学者へのUターン支援	夫婦世帯への定住支援
企業誘致	製造業、医療	観光業+農業/IT産業
通学補助	×(不要)	○(立地上必要)
父親の参画促進	○	×

事業は立地の制約を受けるため、すべての自治体で同じ支援事業を実現できるわけではない。よって、行政側は金銭的支援に頼るのではなく、住民コミュニティの形成に注力し、住民の細やかな意見の反映や、横のつながりの強化を行い、住民が主体となった町の発展や魅力づくりを目指すべきである。

4 政策提言（自治体への事業提案）

婚姻数を増加させるためには、結婚適齢期人口の女性の県外流出を防ぐ必要がある。そのためには女性の県内就職・Uターン就職を促進させる必要がある。静岡県内出身者にとって県外で暮らすよりも良い点は、実家があり生活がしやすいことや、物価が安いことなどが挙げられる。大学生を対象としたアンケート調査では、ベッカーモデルの晩婚化パターンが窺える結果を得た。進学は晩婚化の原因の一つとなっているのであろう。この点では、親との同居が晩婚化を防ぐには役立つだろう。

しかし、静岡県内は交通手段が充実しているとは言い難い面がある。そのため、交通インフラの整備を進める必要がある。東海道新幹線や新東名高速道路などの交通インフラが整っている長泉町では、県外から企業を誘致し就業者を呼ぶことに成功している。交通インフラが整備されれば、県内から県外へ通勤することも可能となる。

女性人口の減少をくいとめるには、製造業や、卸売・小売業、医療・福祉業における女性就業者数を増やすことも重要である。特に、女性が製造業で働く必要がある。そのためには従来では雇用機会や職場環境の改善が挙げられてきたが、女性側の製造業に対する意識改革をする必要がある。例えば、女性向けの説明会や、セミナー、インターンシップなどを開催し、女性の活躍の場があることを知ってもらう場を提供することなどが挙げられる。

また、大学生からの意見では、保育所・託児所に子供を入れられるかどうかや、子供の教育費・養育費に対する不安があげられた。しかし、実際には、多くの自治体は補助金を支給している。そのことがあまり知られていないので、子育て環境が整っているということを改めてアピールする必要があるだろう。

**私たちが作り出すライフデザイン・プロジェクト事業
～ジェンダーに縛られない子育て社会を目指して～**

静岡県立大学 国際関係学部 犬塚ゼミ

参加学生	小長谷倅子 青木 優子 白石 優花 前田 汐里 藤田 美桜子 永井明日香 渡辺 智奈 柴崎 彩香 鈴木 麻耶 中村 大智 中村 仁美 村上 実邑 桑原 麻衣 滝 千鶴
指導教員	犬塚 協太

1 事業目的

自分たちの将来像（結婚、出産、子育て）に関して具体的にイメージする機会を、さまざまなライフデザインのロールモデルを交えた討論の機会を通して大学生に持ってもらい、特にジェンダーに縛られない多様な仕事と子育ての両立の可能性の理解を深めてもらう。

また、現役世代の女性たちからの意見聴取・意見交換を通して、結婚、出産、子育ての現状と課題を明らかにし、上記の結果と合わせて、現代の子育て問題に対してジェンダー平等の視点から望ましい政策の提言につなげていく。

2 企画内容

ライフデザインを考える事業の企画として、結婚・子育てに関する大学生と多様なライフデザインのキャリアを持つロールモデル講師を交えた討論の場としてのワークショップや、実際の子育て経験女性からの意見聴取と対話に基づく、大学生と現役子育て女性たちとの意見交換会を開催することにより、大学生が将来、結婚、出産、子育てをすることを具体的にイメージし、そこでの課題を明らかにする機会を作る。

I 「ハッピーライフ相談会」（結婚、出産、子育てを考える大学生ワークショップ）

全体のスケジュールは以下の流れにそって進めた。

- ① 事前に参加学生（静岡県立大学）に将来自分がどのようなライフプランを描くかを記入する課題シートを配布しておき、それに記入して当日持参してもらう。
- ② あらかじめ4，5人のグループに分かれ、各グループで自己紹介をかねて各自が書いてきた事前課題を発表してもらう。
- ③ その後ロールモデル講師に家庭と仕事の両立について、それぞれの経験に基づいたライフデザインの現実と課題について話をしてもらう。

- ④ 改めて講師に加わってもらいグループワークを行って、参加学生は話を受けて事前に考えてきたライフプランの修正や改善、またそのために行政や企業、家族などに求められることを議論してもらう。



（実施日：平成 28 年 11 月 29 日）

II 「島田市意見交換会」（結婚、子育てを考える意見交換会）

内容：静岡県が調査した「ふじのくに少子化突破戦略の羅針盤」によると、島田市の出生率に影響している市・町の総合力というレーダーチャートの値は、各項目とも静岡県の平均値とほぼ一致している。そのため、島田市での現状を理解できれば静岡県全体の課題解決に向けた政策提言に繋がると考えられる。島田市にある、子育て総合啓発支援グループである「まいせるふ」の協力を得て、子育て当事者による現役世代の女性たちを講師に迎え「ハッピーライフ相談会」の結果を踏まえて以下の4点を中心にジェンダーという視点から大学生との意見交換を行った。

- ① 女性が仕事と子育てを両立する上で、パートナーとしての男性に求められることは何か
- ② ①を実現するために必要な職場や企業の協力は何か
- ③ 地域社会に求められることは何か
- ④ これら全てを通して行政に求められるものや政策、課題は何か



(実施日：平成 28 年 12 月 12 日)

3 企画を通して明らかになったこと

Iの「ハッピーライフ相談会」では学生たちが最終的に描いたライフプランは大きく3つに分かれた。(ただし、これはあくまで今回の参加者の数値なのでこれだけで静岡県立大学の学生の傾向を表しているとはいえないことをお断りしておく。) Aは「将来結婚をして子どもを授かりたい」と考える学生、Bは「将来結婚はしたいが子どもを授かるつもりはない」と考える学生、Cは「将来結婚するつもりもなく子どもを授かるつもりもない」と考える学生である。圧倒的に多かったのはAの学生で全体の約8割あり、次いで多かったのはCの学生で約1割ほどあった。ちなみに、Bの数は1割を下回った。

それぞれのプランの特徴を見てみる。「将来結婚をして子どもを授かりたい」と考えているAの学生の半数は、事前課題の時点では結婚または出産を機に一度仕事を辞めると考えていたが、企画を通して育休を取得して仕事と子育ての両立をしたいと考え方が変化した。残りの半数はもともと育休を取得して両立を考えていたという結果が出ていた。そのため、

就職は育休取得に肯定的な企業にしたいという意見や仕事をずっと続けたいと考えている学生が約7割に上った。また一貫して見られた特徴としては、結婚は25歳～28歳でしたいと考えている学生が9割近くおり、子どもは2～3人授かりたいと考えている学生が8割であった。その中でも2人授かりたいと考えている学生が7割であり圧倒的だった。Bの「将来結婚はしたいが子どもを授かるつもりはない」とプランを立てた学生の結婚したい年齢は、Aのプランの学生とほぼ同じで20代後半～30代前半と気持ち遅めとなっていた。ここから、子どもを持たないと晩婚化がより強いという傾向が見える。Cの「将来結婚をするつもりもなく子どもを授かるつもりもない」と考えた学生は、自由を重視する傾向があり、一人でも自立した生活ができるような職に就きたいという意見が多かった。このことから、家事・育児にとってかわるものがこの学生たちのライフの中にあると分かる。また、これらの学生たちは優先順位をつけて結婚の消極的に排除をしているというよりは、そもそも結婚に希望を持っていないという点で、結婚を積極的に排除をしている傾向がある。

男女別に多かった意見をまとめると、男子学生は、家事・育児に積極的に関わりたい、育休を取ってみたいというジェンダー役割に捕らわれない意見が多く見られた。一方女子学生は、企画に参加する前は家事・育児は女性が負うものだと思っていたが、企画後は家庭におけるすべての責任を女性が負うのはおかしいと思うようになった、といった意見の変化が多く見られた。また、夫にも家事・育児の参加を求める声が多かった。

その他全体を通して見られた特徴は、事前に考えていた結婚をするかしないか、子どもを持ちたいかそうでないかという意見は企画後も変更はほとんどみられなかったことである。

IIの「島田市意見交換会」では、子育て中の女性から話を聞いた結果、様々な問題が見えてきた。まず、女性が仕事をするうえでパートナーに求めることは何か、という議題で話し合いを行い、子育てに対する苦労や意見を聞いた。以下に講師からの主な意見の内容をまとめた。

「夫は子供の夜泣きや便などに気づいてくれない。助けが必要だと感じ取ってほしい。」

「夫に家事を頼むと時間がかかるから、何でも自分でやろうとしてしまう。」

これらの話から、男性には気づくチャンスや経験がないためにこのようなことが起こるとわかった。能力という生物学的な違いでこの問題を考えず、男性にも知識や情報を与え、学習すれば身についていくと考えるべきであろう。そして小中学生のうちから男女問わず、子育てについて勉強したり、赤ちゃんや子どもとふれあう機会を与えたりすることが重要だとの意見が出た。島田市も含め、すでに幼稚園訪問などの体験学習を実施している自治体も多い。しかし、回数や頻度、内容が不十分である。中長期的に子育てを学ぶカリキュラムを組む必要がある。

「夫は帰ってくると疲れてすぐ寝てしまう。結局、家事は私の仕事になる。」

夫が疲れて眠ってしまうと、妻は自分がやらなくてはという気持ちになる。女性たちには、夫が仕事で大変だから自分が家事を全部やらなければいけない、という責任意識が見られた。女性も遠慮せずに夫に助けを求められれば良いが、現状は疲れて寝てしまうほどに男性の仕事の負担が大きく、難しい。家庭だけでは解決できない問題があることがわかった。そこで、職場や企業に求められることは何か、という議題に移った。

「夫の残業が多く、子どもとふれあう時間がない。ノー残業デーを徹底してほしい。」

「子育て中でも、柔軟に働ける職場があったらいい。」

「産休・育休が取れない企業で働いた。会社が出産・子育てを支えてほしい。」

「夫の職場が子育てに理解がなく、精神的にも辛い思いをした。」

男性の長時間労働や残業により、女性に家庭の負担がのしかかっている。また夫の職場の出産・育児に対する理解がないために、女性が辛い思いをしていることがわかった。現在管理職である男性の多くは時代背景的に「男は仕事、女は家庭」と考える人が多い。よって、企業上層部・管理職の意識改革、社員のワークライフバランスに配慮した「育ボス」の育成が強く求められる。出産・育児、趣味など家庭の時間を大切に作る働き方を推進する勉強会を、行政や企業が主導して行うべきだ。そうした動きが性別役割分業意識の払拭につながり、休暇が取りやすい職場なら男性の家事・育児参加も増える。

最後に、地域・行政に求めることは何か、というテーマで話し合いを行った。

「ママ友を作る機会がもっとほしいし、参加したい。」

「市の子育てサポートの存在を広く知らせてほしい。」

「有給、育休取得に力を入れている企業を支援すべき。」

などの意見が出た。子育て中の女性は様々な苦労や悩みがあり、それを誰かと共有したいと思っている。子育てを閉じたものではなく、家族外とのつながりを持つものにするために、行政は「まいせるふ」のような地域の子育て支援団体と協力し、交流の場を与えることが必要である。広報も課題の一つだ。実際に市町では様々な支援を行っているが、その情報が行き渡っていない。広報の仕方を工夫することが求められる。そして、ワークライフバランスに配慮した企業への支援を進めるべきだ。また子育てにおいて、女性と男性が協力して家事・育児を担うことは重要である。そのためには職場の協力や理解が不可欠だ。例えば、くるみんマーク認定企業を広報誌に載せ、企業のネームバリューを上げるなど、行政は企業のやる気を引き出す支援の在り方を考える必要がある。

4 政策提言

I、IIの企画を通して、県の少子化に関する課題と、各課題に対して望まれる政策をまとめた。以下がその一覧である。(左は県が働きかけを行うべき対象となるアクターと政策課題であり、右はその課題に対する具体的な政策内容である。また★は、特にジェンダーの視点から見て重要と考えられる政策課題である。)

少子化に関する政策課題	各課題に対する政策
①地域(県内自治体) 子育て中の男性支援 ★	県内の自治体で行われている父親同士の交流活動を市町に普及
子育てによる孤立化の予防	①各市町に場づくりを奨励、NPOや市民団体の子育て支援活動をサポート ②高齢者男性の育児参加「育ジイ」の普及 ★
子どもの医療体制の充実	子どもの医療費の無償化などを行っている自治体を財政面でサポート
保育園の拡充 多子世帯への支援 ②企業	保育園増設のための予算の増額 第2、3子以降の保育料の助成または無償化を県内の市町に奨励
ワークライフバランスの普及 ★	企業を通じた、子育て中の男女社員への情報提供(給料明細袋に紙やパンフレットを入れるなどして徹底) 県による勉強会・講習会を企業経営者に対して実施。内容を自社に持ち帰ってもらい、自社で実施。その後、報告書を提出してもらう。
男性対象の子育て・育休取得奨励(講習会・勉強会) ★	企業の表彰
育休取得に積極的な企業支援	企業に対し、女性社員の意見を聞く機会を設けるよう指示
育休中の昇進・資格試験の受験奨励	出産・子育てについての理解を深める講習会を企業に対して実施
育休後、職場復帰しやすい企業体制づくり 柔軟な休暇の取得	各社ではなく複数企業を1単位とし、病児保育・託児を設置。複数企業共同のものとし、その設置をサポート
社内に病児保育、託児	有給取得率・残業時間に国以上の目標・上限を設けさせる (罰則規定の条例検討)
有給取得率の上昇 残業時間短縮 ③メディア	youtubeなどの動画を利用した、県の積極的な情報発信
育ボスの普及・育成 ★	①県内自治体の子育て支援情報をまとめた冊子を作り、東京など県外の静岡県事務所や移住相談窓口配布 ②若い世代に人気な芸能人(静岡出身)を活用し、県の子育て支援情報をSNSで発信・拡散
県内への移住奨励	新聞やテレビなどメディアと連携した(またはメディア主催の)シンポジウムや講演会実施
男性対象の子育て・育休取得奨励 ★	取得率の高い企業を地域の広報誌や静岡新聞で紹介
有給・産休・育休取得に積極的な企業を支援	
④学校	
家事・育児の性別役割のイメージの払拭 ★	イクメン講師による講義の実施
子育て支援制度の普及	①産休・育休について学ぶカリキュラムを組む ②自治体の教育委員会や福祉関連団体と協力し、幼稚園・保育園・子供園で保護者へ市町の子育て支援情報を提供
結婚・出産後も仕事を続けやすい企業を紹介	子育て優良企業の学生への情報提供

これまでの取組を通して、少子化対策を考えていく上で、ジェンダーの問題は切り離せないことが分かってきた。むしろ、その問題を解消していくことが少子化対策にも繋がると推測できる。そこで、上記の提言の中からジェンダーに関する提言を以下にまとめた。

① 地域（県内自治体）に関する政策課題とその課題に対する政策

地域に対して県に求められることの主なることは、各地域の自治体をサポートし、子育て中の女性や男性の交流の場を設け、それを普及させていくことである。また子育てを家庭の問題に止めて扱わず、たとえば地域の高齢者(特に男性)の子育て支援参加を促していくことで、子育て世代の負担を軽減させることが望まれる。

② 企業に関する政策課題とその課題に対する政策

企業に対して県に求められる主なることは、各企業にある程度の強制力を持ってワークライフバランスの普及を行って行くことである。例えば、給料明細にワークライフバランスに関する情報を同封することを徹底し、男女問わず各個人にまで提供が届くことを目的とした新たな取組なども有効であろう。また、男性の中でも経営者や管理職を対象に子育て・育休取得に関する講座や勉強会を開催することで、より働きやすい企業が増えていくことが期待される。

③ メディアに関する政策課題とその課題に対する政策

メディアに対して県に求められる主なることは、若い世代が活用するインターネット（主に SNS や動画）を活用してより広く情報を広めていくこと促進していくことである。「育ボス」のような今後特に期待される存在の拡散には、若い世代に人気のある静岡県出身タレントなどを使った SNS や動画は特に有効的に活用できると考えられる。また、情報発信だけではなく、メディアが他の媒体と共催して講演会やイベントを開催することで幅広い層に情報提供できると期待される。

④ 学校に関する政策課題とその課題に対する政策

学校に対して県に求められる主なることは、学生という若い年代から性別役割分業意識を解消するために、イクメン講師などによる男子の意識喚起もうながす講座を開催することである。また、県の推奨する子育て支援制度を教育委員会や福祉団体を介して、学校側から生徒の保護者へと情報が行き届くようにサポートすることがあげられる。

若者の将来にとって魅力的なまちづくり
～「ワークとライフのワストップ・カフェ」の実践を通じて

常葉大学 法学部エリア・デザイン研究会

参加学生	松井 千紘 秋野 徹 幾見あすか 栗田 純 酒井 綾音 佐野 佑奈 實石銀志郎 下山 美樹 長澤 和樹 林 智実 矢崎 穂花 和田 耕輔 宮野川綾夏 石部 花奈 丸山 悠乃 浜島 夏帆 富田 亮平 平口 孝康 藤山 俊哉 小澤 義樹 長田 健太 村瀬はるな 中山奈津実 秋山 敦美 鈴木 文奈
指導教員	柴 由花

1 目的

地方では、大都市への「若者流出」が問題となっており、「少子化対策の視点からも、地方若者（男女）が大都市へ流出する『人の流れ』を変えることが重要」とされている。常葉大学法学部エリア・デザイン研究会の学生は、とすると就職ばかりに目がいってしまう学生が、今後経験するであろう就職→結婚→出産→育児というステップまでをも意識したライフデザイン考える機会づくりを企画し、若者の将来にとって魅力的なまちづくりについて政策提言を行なうこととした。

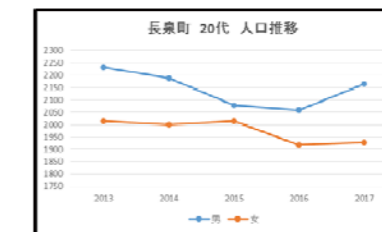
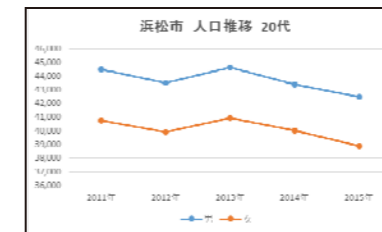
まず、少子化の実態について、20 代の人口の増減、大学生の地元志向意識、合計特殊出生率について調査した。次に、学生が、子育て世代とのワークショップやアンケートを通じて、子育て世代の意識を調査し、静岡での子育ての魅力について考えた。さらに、学生が地方に定住するというライフデザインを描く上で、どのような地域情報が必要かについて検討した。

2 実施内容

(1) 少子化の実態

①20 代の人口比較調査

静岡県全体の人口減少が進んでいるが、地域差がある。静岡市の 20 代の人口は 2016 年 12 月末で、男 34,923 人、女 32,485 人であるが、過去 5 年間、減少傾向が続いている。浜松市も同様に、減少傾向にある。他方、長泉町の 20 代の人口は 2017 年 1 月で、男 2,164 人、女 1,928 人であるが、近年増加傾向にある。



②大学生の地元志向意識調査

常葉大学法学部のオープンキャンパスを訪れた高校生に対するアンケートをし、地元志向意識を調査した。県内の大学への進学については前向きな意見が多くみられた。県内の大学へ進学する理由としては、①安心、②経済的、③通学に便利、④地域との結びつき、⑤県内企業への就職といった事項が挙げられた。アンケートによると大学卒業後も県内で就職することを希望している意見が多く見られた。ま

た、県内に暮らし続ける魅力として、①安心、②環境、③地域を挙げる回答が多く見られた。将来の不安については、①就職、②収入、③大学受験に関する記述が多く見られた。以上のアンケート回答から、地方での就職を見据えて大学選択時に地方にとどまることを考えている学生が少なくないと考えられる。

常葉大学法学部は、2017年3月に第1期生（約200名）を輩出したが、第1期生の多くは、就活にあたって、県内の企業への就職を考えており、企業選定の段階で県外への就職を希望する学生は少数派であった。実際、第1期生の県外企業への就職率は3%程度と低く、「静岡県内への定着度」は、極めて高いと言える。

③合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に産む子どもの数）の比較

次に、人口が増加し周辺自治体と比べ合計特殊出生率の高い自治体に着目した。県外では千葉県・流山市と東京・江戸川区とを調査した。また、県内では、長泉町と浜松市とを調査した。

東京都の合計特殊出生率が高いのは、港区（1.44）、中央区（1.43）、江戸川区（1.42）、江東区（1.42）である。江戸川区は、23区の中なかでも公園面積が最も広く、乳児養育手当（ゼロ歳児）の補助金制度など子育て支援制度も充実している。しかし、子育て世代の中からは、「保育園問題は話題の通り本当に難しいです。江戸川区では私立保育園が多いのですが、年収による保育料の差が小さく、収入の少ない世帯にとっては負担が重め¹となっているので、収入などを考えながらやっていくのも大変だと感じました…東京は、とても子育てしにくいと思います。」といった本音も聞かれた。千葉県流山市は、定住化促進のターゲットを子育て世代にし、駅前保育送迎ステーション等の施策を講じた結果、4歳以下の子ども数も増え、合計特殊出生率は千葉県平均や全国平均よりも高くなっている²。

静岡県の合計特殊出生率をみると裾野市と長泉町が1.82と高く、最も低い熱海市でも1.22である³。

長泉町の合計特殊出生率の推移を見ると国や県に比べ高く、出生率も県内でトップである。長泉町は、「充実の子育てサポート体制」で知られており、子育て支援センター設置等、第3子以降の幼稚園保育園無償化や補助、中学生までの医療費無料という自治体では珍しい「こども医療費助成事業」を展開している。浜松市では2015年の合計特殊出生率が前年を0.05ポイント上回る1.49となり、県内の出生率1.54には届かなかったものの、5年ぶりに上昇した。上昇に転じた要因について、出産間もない親子のために行っている「こんにちは赤ちゃん訪問事業」等の子育て支援策が徐々に浸透したことが考えられる。浜松市は、子育て情報サイト・ぴっぴにおいて子育て当事者、支援者、地域、行政をつなげるため、情報発信を行っている。

以上から、子育て世代のニーズをとらえた支援等に取り組んだ自治体では、合計特殊出生率が上昇していると考えられる。

（2）子育て世代との対話と静岡での子育ての魅力

①「ワークとライフのワンストップ・カフェ」ワークショップの実践

学生にとって、ワークとライフの連続性が見えにくいいため、ワークとライフのワンストップで考える機会が必要である。託児施設等において若者が、働く子育て世代のリアルな生活の姿に触れることで、今後の将来のライフプランをイメージできると考えた。そこで、「ワークとライフのワンストップ・カフェ」ワークショップを静岡市葵区・竜南保育園で開催した。働く子育て世代のリアルな生活の姿に触れ、県内にて就職、結婚、子育てをしていくことの魅力や意義を探り、ライフデザインについて考えた。子育て世代へのアンケートでは、静岡での子育てについて「身近に助けてくれる人がいる」との回答が多く、仕事と生活のバランスについては、「仕事と育児のバランスがとれている」との回答が多かった。子育ての負担については、「肉体的に負担を感じる時がある」、「経済的に負担を感じる時がある」といった回答に比べ、「精神的に負担を感じる時がある」という回答は少なかった。『ふじのくに少子化突破戦略の羅針盤』における静岡市の家族・地域の絆力は県平均よりも低い結果が出ているが、ここでは家族・地域の絆力が高い結果が見られる。

竜南保育園保護者会へのアンケート

静岡市で子育てをすることについて(複数回答可)	人
1. 自然や季節を感じながら子育てすることができる	4
2. 身近に助けてくれる人がいる	7
3. 勤務先へのアクセスが良い	2
4. 経済的な支援が行き届いている	0
仕事と生活のバランスはとれていると感じていますか	人
1. 仕事と家庭生活(育児を含む)のバランスがとれている	7
2. 仕事を中心となり、もう少し家庭生活の比重が高まるとよい	1
3. 育児が中心となり、もう少し仕事の比重が高まるとよい	1
4. 未回答	2
現在の子育てに負担を感じたことがありますか(複数回答可)	人
1. 経済的に負担を感じる時がある	5
2. 肉体的に負担を感じる時がある	8
3. 精神的に負担を感じる時がある	3

³静岡県健康福祉部「静岡県の少子化関連データ」
<https://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-130/documents/261127syousika-data.pdf>

流山市 合計特殊出生率の推移



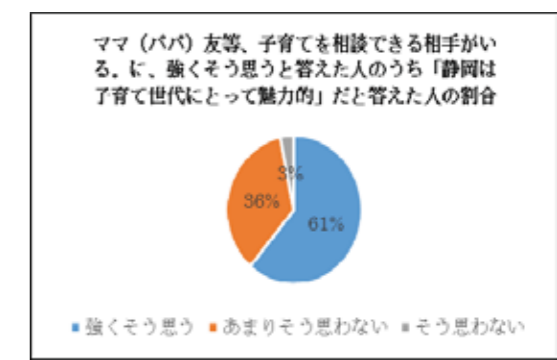
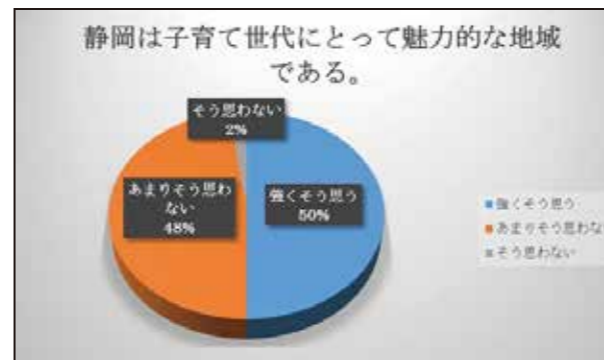
<http://www.city.nagareyama.chiba.jp/appeal/9577/009582.html>

駅前保育送迎ステーション

流山市役所が社会福祉法人高砂福祉会に委託して行っている事業である。もともとは、すべての認可保育所(園)をフル活用して待機児童の軽減を図るために導入された。導入以前は、イライラや焦りの心理的負担・朝や夕方の厳しいスケジュールによる自転車などの無理な運転による危険・早起き等による睡眠時間の減少等が問題となっていたが、このステーションの導入により、送迎時間が短縮され、精神的・肉体的負担も減り、健康面への悪影響が解消した。また、最近では親が幼児教育に関心をもっており、少し遠くても、ステーションを活用することで親は希望する幼稚園に子どもを預けることができるようになった。

¹ <http://news.mynavi.jp/articles/2016/09/15/tokyo400/>
² <http://www.city.nagareyama.chiba.jp/appeal/9577/009582.html>

また、少子化が進む静岡市葵区の井川地区で「ワークとライフのワンストップ・カフェ」ワークショップを開催した。井川に移住し子育てをしている方から、学生時代の井川での体験が移住の動機の一つになっていること、子育てに関して地域全体が協力してくれること、豊かな自然環境の中での子育てに関する魅力や不安を伺った。井川の人口減少等について意見交換を行い、定住人口を増やすよりも、まずは地域の情報を発信して交流人口を増やすことが重要といった意見が出された。



(3) 学生のライフデザインと地域情報

①「地方都市における学生のライフ・キャリア・パースペクティブ」

常葉大学法学部、造形学部の学生のほか、県立大学、静岡大学の学生や、地域住民が参加し、「なぜ、若者が地域に定着しないのか」という問題について意見交換を行った。大学生全体の県内への定着希望度は決して高くはないとも考えられる。しずおか産学就職連絡会が2017年1月31日に発表した推計調査によると、県外から静岡県内の大学に進学した学生のうち、静岡県内の企業に就職する県内定着率は20%にとどまっている。ワークショップでは、まちづくり、子育て、企業におけるダイバーシティの観点から考え、以下のような意見が出された。

- ・静岡で働くことのメリットを学生が分かるように、もっと情報を流す。
- ・静岡がどのような子育て支援を行っているのか意識して知ることが必要である。
- ・大学進学時に地方から出て行ってしまったとしても、就職時や子育て時に戻れることが重要である。
- ・都会にはあまりない地域のつながりや、愛着をもってもらうことで、地方で子育てしたいという若い世代を増やす。
- ・学生が定着しないことに関しては、やはり地域に関する情報不足が原因。
- ・企業説明会などでの情報も必要だが、本質は実際にそこで働く人と対話が重要。

「地方都市における学生のライフ・キャリア・パースペクティブ」
(平成28年10月15日) 水落校舎：40名



②シンポジウム「ライフデザインと地域情報」

シンポジウム「ライフデザインと地域情報」では、先進的な企業の働き方に対する取り組みや金沢における学生と地域との結ぶ活動を紹介していただくとともに、子育て世代にも参加してもらい、ライフデザインを考える上で必要な情報についてディスカッションを行った。「静岡は住みやすいので、ぜひ県内で就職をしたい」、「子育ても視野に入れて就職を考えたい」、「地域で活躍する人の情報を取り込むべき」といった意見が聞かれた。また、参加した学生からは、「起業して、地域により根ざしていきたいと考えるようになった」といった意見が出された。

「ライフデザインとダイバーシティ」

配偶者海外赴任帯同休職などの休職や半日単位で取得可能なライフサポート休暇、コアタイムが選択できるフレックスタイム制、在宅勤務制度を導入し、社員が働き続けられる労働環境・制度を整えてき

「ワークとライフのワンストップ・カフェ」ワークショップ
(平成28年9月3日) 竜南保育園：20名



「ワークとライフのワンストップ・カフェ」ワークショップ
(平成28年11月4日) 民宿ふるさと：15名



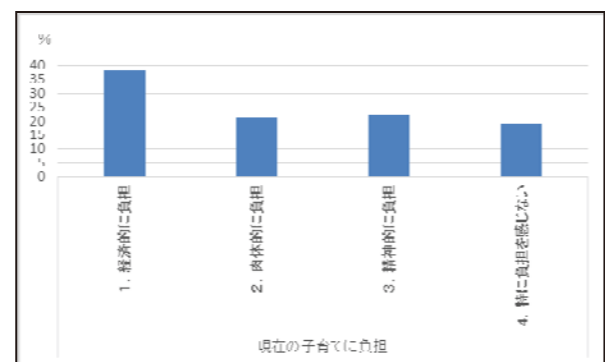
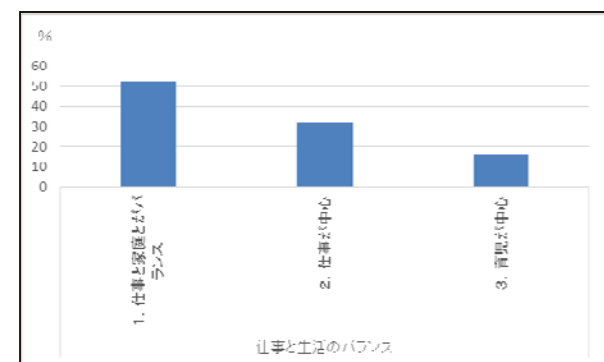
②子育て世代へアンケート

静岡市でお祭り（清水七夕まつり、太田町夜店市）に来場した子育て世代にアンケートを行い、子育て世代が静岡での子育てについてどのような意見を持っているか調査した。

清水七夕まつり（平成28年7月7日～10日 対象：子育て世代 約300人）

仕事と家庭のバランスがとれていると回答した世帯が半数以上を占める反面、半数近くの世帯で仕事と家庭のバランスがとれておらず、その中でも仕事を中心となっている家庭が多い。

子育ての負担感については、経済的に負担を感じている家庭の割合が一番高い。次に、肉体的、または精神的に負担を感じている家庭の割合がほぼ等しい。



太田町夜店市（平成28年9月18日 対象：子育て世代 約30人）

子育て世代へのアンケートでは、子育て世代の大部分が静岡の子育てを魅力的だと思っており、ママ友（パパ友）がいる人のほうが、強くそう思っている割合が高い。太田町夜店市の来場者は近隣からの来場者がほとんどと考えられるため、地域の絆の高さが、子育てのしやすさにつながっていると考えられる。

た。一方、こうした企業の取り組みについて、企業間取引が主であるため、就活時に、学生に知ってもらうことが難しいといった問題がある。

「金沢の若者と地域を結ぶ取組み」

金沢で地域コーディネーターとして起業し、学生と中小企業とを結ぶ取り組みを行っている。学生は何かやりたい！大人は応援したい！という気持ちを持っているが、両者をつなげる仕組みがなかった。学生は、卒業すると、東京や海外に流出してしまう。やる気のある人を受け入れる受け皿を用意することが重要。学生だけでなく企業側にも問題があるため、人材が地域に就職、戻って来る枠を用意する。

学生時代、学生が地域の企業等と商品開発等に関わることで、卒業後、その会社に就職したり、自ら起業したりする人もいる。

「地域情報マップの作成」

学生の地元への定着願望度が高いといっても地域の魅力等を十分に熟知しているとは限らない。地域の情報を視覚化することで、世代を超えた関心を集め、住みやすいまちづくりを提言することが可能となり、ひいては積極的に地元に残るきっかけや新たな移住希望者が地域に興味をもつきっかけにもなる。地域情報マップは紙ベースのマップとは違い、ネット環境さえあれば、いつでもどこでも誰でもすぐに見ることができる。マップ作りに大学生や高校生など若い人たちも参加することで、当地人たちが静岡についてより深く知ることができ、静岡に愛着が湧き、静岡に残ろうと思う人も増える。継続的な連携をもった取り組みで地域情報マップを作成し、その地域にもともと住んでいる人も移住してくる人も、子育てに必要な施設やバスの運行状況、生活するうえで必要な施設等を簡単に把握できる。

「地域情報マップ」



<http://area.design/>

- ・「ライフデザインとダイバーシティ」
- ・平井 梓 ジャコ(株) 人事部
- ・ダイバーシティとは、多様性を意味し、人種や国籍、性別や年齢、障害の有 無を問わずに、働きやすい組織を作るという取り組みです。ダイバーシティを経営に取り入れ、多様な働き方を可能にすることは、社員のライフデザインにとって、どのような影響を与えているのか。「平成27年度新・ダイバーシティ経営企業100選(経済産業省)」に県内企業から初めて選出された企業の方からお話を伺った。
- ・「金沢の若者と地域を結ぶ取組み」
- ・仁志出 憲聖(株)ガクトラボ代表、金沢学生のまち市民交流館施設コーディネーター
- ・金沢市は平成22年に「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」を制定し、学生と市民との交流を促進してきた。起業に至った経験、金沢での就職や採用力強化支援などの学生団体の取り組みを紹介していただいた。
- ・「ライフデザインと地域情報Map」
- ・和田 耕輔 常葉大学 エリア・デザイン研究会
- ・エリア・デザイン研究会のメンバーは、「ワークとライフのワンストップ・カフェ」ワークショップから得た知見をもとに、地域の方と協力して、地域情報Map・井川(<http://area.design/>)を作成し、地域の生活情報を「見える化」した。

「ライフデザインと地域情報」(平成 29 年 1 月 21 日)

水落校舎：40名



3 分析、課題等(事業実施により明らかになったこと)

- ・学生が地元に着るといったライフデザインを考える上で、地域情報と地域で活躍している人に関する情報が不可欠である。
- ・学生が就職後の地域での子育ても含めた生活をトータルとして意識することが、少子化対策に結び付くと考えられる。

(1) 子育てと仕事が両立できる環境整備の必要性

子育て世代との対話やアンケートを通して、子育てにかかる費用の負担軽減、仕事の都合によって柔軟に対応できる託児所の充実、また企業の子育てへの理解度など、子育て世代の女性が働きやすいと思える環境作りへの課題の多さが分かった。

特に企業理解という点において、ダイバーシティへの取り組みが重要である。その人に合った働き方を選択でき、長く働き続けられる企業が求められており、企業内託児所や育児休暇の取りやすさも働く女性にとって強い味方となる。そういった企業が魅力的だと思われる企業になり、働いている女性が子どもを産むことをためらう現状を改善できるのではないかと。

他にも、子育てに関しては、子育て世代のいうように日曜出勤時の保育の問題や待機児童等の問題、経済的支援の問題等、行政が解決すべき問題も少なくない。

将来の子育て世代である学生に安心感を与えるためには、民間企業や行政が連携して、こうした問題に取り組む必要がある。

(2) 学生と地域との絆作りの必要性

学生時代に就職後の生活をイメージすることは容易ではない。「ワークとライフのワンストップ・カフェ」では、学生が県内で就職、結婚、子育てをしている保護者の方のリアルな生活の姿に触れた。そこでは、周りに助けてくれる人がいるということが静岡市での子育ての魅力の一つであること、また、ママ友(パパ友)がいる人のほうが静岡での子育てに魅力を強く感じていることが判明した。学生は、なんらかの形ですでに地域との絆があると考えられ、あるいは、これから地域を知ることによって新たな絆を発見することができる。そのような地域との絆が、将来の子育てをするにあたっての安心感につながると考えられる。

学生が地域での生活を選択するにあたっては、ネット上の情報のほかに、地域の大人のライフデザインについての生の声を参考にすることが考えられるが、学生が地域の魅力ある社会人や子育て世代と交流する機会が欠如している。「ライフとワーク」について、学生と社会人とが意見交換を行う場やその間

を取り持つコーディネーターの存在が望ましい。

（3）学生が必要とする地域情報と情報の見える化の必要性

学生が地方に定着しないことに関して、情報不足が原因であると考えられる。地方では、特に、企業間取引の多い企業や中小企業等の情報が不足しているため、雇用のミスマッチが生じやすい。学生が必要としている地域情報は、まず、働く場（ワーク）の情報である。企業情報のみならず、ダイバーシティを重視し、働き方改革を進める企業の情報等に学生がアクセスしやすくすることが必要である。次に、生活の場（ライフ）の情報である。将来のライフデザインに係る子育て施設等の情報に加え、地域で活躍する人、働きながら子育てをしている人の情報も必要である。

地域情報マップにより、情報が視覚化されることで、静岡の情報にアクセスしやすい環境を作り出すことが可能である。マップを作成する側についても、実際に現地へ赴き、現地の方と交流することで新たな魅力を発見し、さらに多くの高校生や大学生を作成側に巻き込んでいくことで、静岡に愛着をもってもらい良い機会になる。地域情報の収集にあたって、学生が静岡県の情報を知ることが、地域への愛着を高め、定着やUターンに結び付く。地域情報を可視化し、インターネットで発信することで、自らのライフデザインに資するだけでなく、交流人口、定住人口の増加につながると考えられる。

4 政策提言（自治体への事業提案）

少子化の原因として、家族・地域の絆力が関連している。地元に残った学生が、地域の絆を感じて、安心して結婚、子育てをしていくことが少子化対策につながる。子育て世代とのワークショップ、さらにシンポジウムやヒアリング等を通して、静岡県に必要なことは何か、学生の目線から政策提言を行う。

地域情報の見える化～地域情報マップを活用して～

若者が地方に定着しない理由として、大学進学や就職を機に県外へ出て行ってしまふことがあげられる。また、静岡の魅力が若者に知られていない、あるいは伝わっていないことによる地域への愛着不足も、県外に若者が流出する一因と考えられる。県外へ出て行ったとしても、就職時や子育て時に地元へ戻ってきてもらうことが少子化対策に重要だと考える。そのためには、静岡の魅力を十分に若者へ発信すること、また、ワークライフバランスの実現ができる企業の情報をよりオープンにすることで、県内で就職をするきっかけになり、愛着のある地域での結婚、子育てにつながっていくのではないかと考える。若者の将来にとって魅力的なまちづくりのために、静岡の地域や企業の魅力について、学生が地域と連携して、地域情報マップを制作し、情報発信していくことが必要である。

現在、地域情報マップの対象を静岡市井川地区に限定しているが、今後、地域情報マップの対象を静岡市中心地等にも範囲を広げ、より多くの地域情報を収集し地域情報マップを制作していく。このマップには、子育て施設や、地方の若者が知りたいと思う地元企業についての情報等、制作に携わっている学生の紹介文等を通して、親しみやすいマップ作成を目指していく。地域情報マップの制作を通じて学生が地域の魅力ある社会人等と交流が可能になると考えられ、さらに、子育て等の地域課題が明らかになる。情報をもとに、学生が静岡でライフデザインを描くことができるようになるだけでなく、県外から静岡に興味をもった人たちが静岡を訪れ、子育て世代の移住希望者を呼び込むきっかけになることが期待できる。

学生が今後さらに地域情報の見える化に携わることで地域の絆力が高まり、少子化対策につながると考えられる。

保育者をめざす学生たちが安心して子どもを産み育てられるために — 先輩保育士のライフデザインから学ぶ —

静岡英和学院大学 人間社会学部 コミュニティ福祉学科 永田ゼミ

参加学生	増野 春維 栗下 麻衣 伊東 里紗 平岡みさき 村上 桜 濱滝久瑠実 武田 友里 深澤奈津紀 滝浪 舞 石田 遥香 花村 美緒 雨夜 美穂 雨宮 大介 飯塚 莉奈 佐藤 未来 鈴木 晴香 高橋 愛花 田中 優希 永井 沙里 増田 翼 松葉優利亜 望月 綾香 安池 優奈
指導教員	永田 恵実子

1 目的

静岡英和学院大学永田ゼミで学ぶ学生たちの多くは、保育者をめざしている。彼らのほとんどが学生時代、思い思いに「将来のライフデザイン」を描き、30代前半までには結婚を考え、何人かの子どもももちたいとの夢をもっている。大学卒業後には、保育の知識を得た子育ての知識をもった大人となり保育実践家として保育現場で活躍する。当然、卒業後数年の勤続年数を経れば20代後半となり子育ての専門性も身に着いてくる。

ところが、現職となった保育者たちは、学生時代に描いていたように、ある程度の年齢で結婚して子どもをもちたいと希望した「将来のライフデザイン」が現実のものとなっているかと考えると、そこには思うようにいかない現実がある。

現在までに、先輩保育士たちのライフイベントの流れや理由、その意図の詳細を探り出した報告はほとんどない。したがって、今回の事業では、「保育者たちの現実のライフデザイン」を描きだすことで、その問題の詳細を明らかにしたいと考えた。

本事業を通しての期待される効果として、学生自身が、先輩保育者たちの躰きやあきらめの現実を分析した結果から「未来のライフデザイン」の問題の検証を行うことで、今現実に必要な行政支援が検討されると考えた。つまり、静岡県の若者たちが、より鮮明に将来の見通しをもてるようになるのではないかと睨んでいる。

2 実施内容

（1）対象者

事業対象者は県内全域保育所の現職保育者と永田ゼミ学生。

（2）研究の方法

①県内全域保育所の保育士と永田ゼミ学生から「ライフデザイン」についての意識アンケート調査（2016年11月～2016年12月）。

・調査項目は、年齢や性別、結婚願望やその相手に望むこと、結婚のタイミング、子どもの人数、仕事の継続、結婚出産・子育てと仕事についてなど全部で19の項目。

②保育所5か所（写真3参照）「ライフデザイン」について聞き取り調査
質問項目は、ご自身のライフプランを振り返る、その他など2の項目

③保育所5か所で保育者との「ライフデザイン」の交流会。助産師による「子どもを産む・育てる」をテーマにした講座開催（図8参照）。

以上の取り組みから調査研究を行った。

3 分析、課題

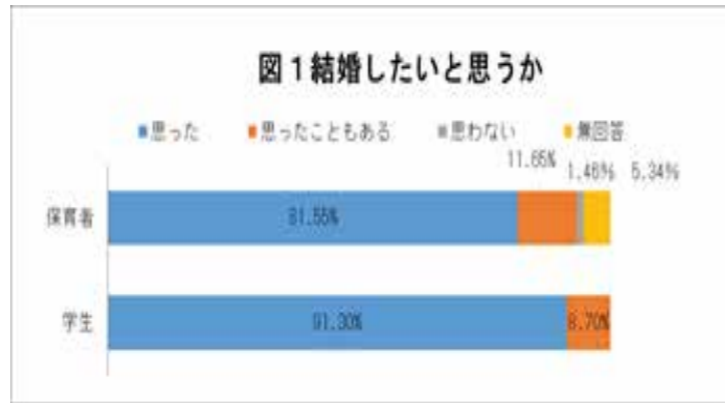
(1) アンケート調査

アンケート調査では、保育者と学生の回答から「ライフデザインについての意識」の違いを比較した。保育者のアンケートは静岡県内保育所にランダムに 230 部配布した。回収した回答数 206 件、回答率は 89.56%であった。学生回答数 23 人、本事業参加永田ゼミ学生全員（100%）の回答を得た。ここではアンケート調査で実施した 19 項目中 9 項目を抜萃した。

1) 結婚したいと思うか

保育者の調査数 206 件中、結婚したいと思った 81.55%（168 人）と思ったことがある 11.65%（24 人）と回答した人を合わせると 93.20%となり、ほとんどの保育者が結婚を希望していることがわかった。また、学生の回答数 23 件中、思った 91.30%（21 人）と思ったこともある 8.70%（2 人）を合わせると 100%ですべての学生が結婚を望んでいることがわかった。

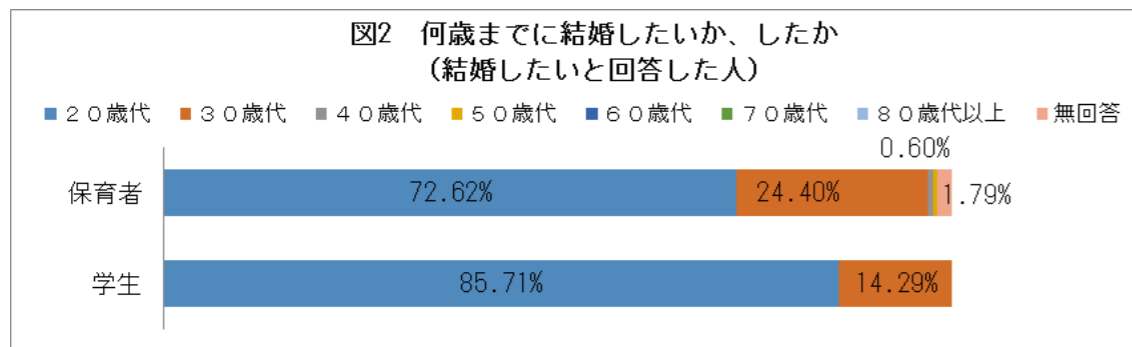
調査数	思った	思ったこともある	思わない	無回答
保育者(人) n=206	168	24	3	11
学生(人) n=23	21	2	0	0



2) 何歳までに結婚したいか

保育者の調査数 168 件中、第 1 位 20 歳代 72.62%（122 人）、第 2 位 30 代 24.40%（41 人）であった。合計すると、97.02%である。学生は回答数 21 人中 20 歳代 85.71%（18 人）、30 歳代は 14.29%（3 人）。合わせると 100%である。保育者、学生とも 30 歳代までに結婚したいと希望していることが見て取れた。

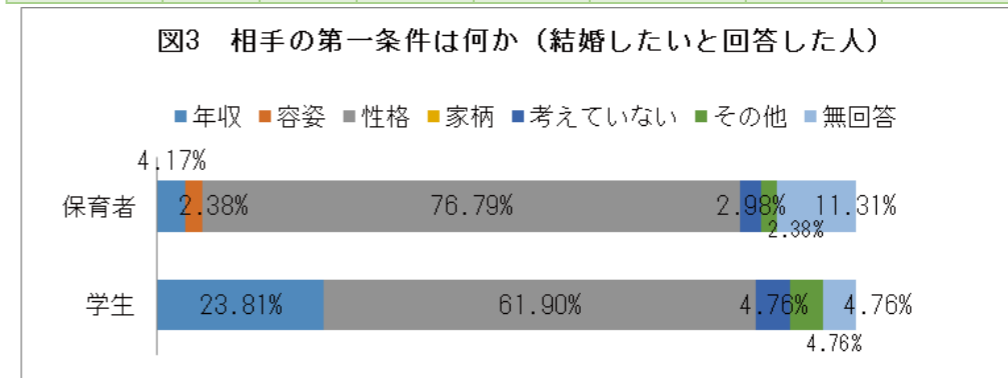
調査数	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代以上	無回答
保育者(人) n=168	122	41	1	1	0	0	0	3
学生(人) n=21	18	3	0	0	0	0	0	0



3) 結婚相手の第一条件は何か

保育者の調査数 168 件中、第 1 位性格 76.79%（129 人）、2 位無回答 11.31%（19 人）3 位年収 4.17%（7 人）であった。学生の回答数 21 件中、第 1 位性格 61.90%（13 人）、2 位年収 23.81%（5 人）3 位は考えていない、その他、無回答と同数 4.76%（1 人）であった。保育者、学生のどちらも性格重視で相手を捜していることが理解できた。また、学生は相手の年収の重要性も考えていることがわかった。

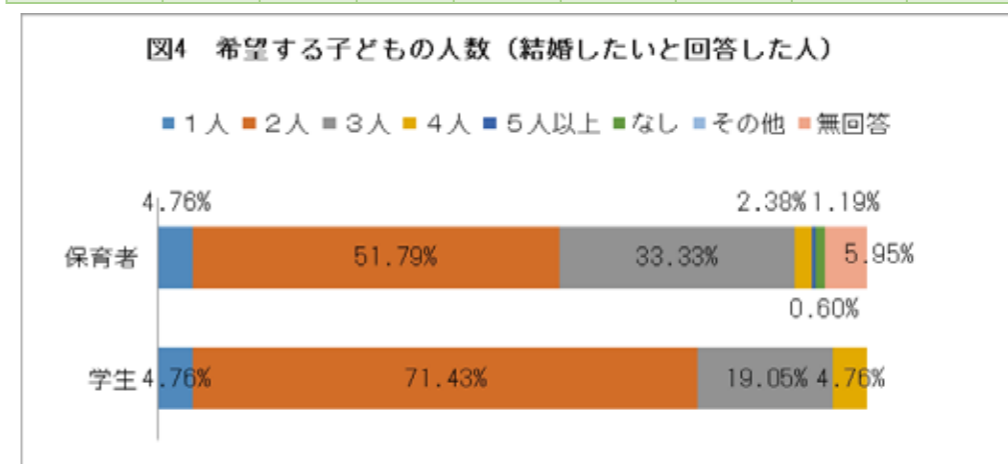
調査数	年収	容姿	性格	家柄	考えていない	その他	無回答
保育者(人) n=168	7	4	129	0	5	4	19
学生(人) n=21	5	0	13	0	1	1	1



4) 希望する子どもの人数(結婚したいと回答した人)

保育者の調査数 168 件中、第 1 位 2 人 51.79%（87 人）、第 2 位 3 人 33.33%（56 人）第 3 位無回答 5.95%（10 人）であった。学生回答数 21 人中、第 1 位 2 人 71.43%（15 人）、第 2 位 3 人 19.05%（4 人）第 3 位は 1 人と 4 人が同 4.76%（1 人）。保育者、学生とも 2 人～3 人は子どもが欲しいと希望していることが理解できた。

調査数	1人	2人	3人	4人	5人以上	なし	その他	無回答
保育者(人) n=168	8	87	56	4	1	2	0	10
学生(人) n=21	1	15	4	1	0	0	0	0

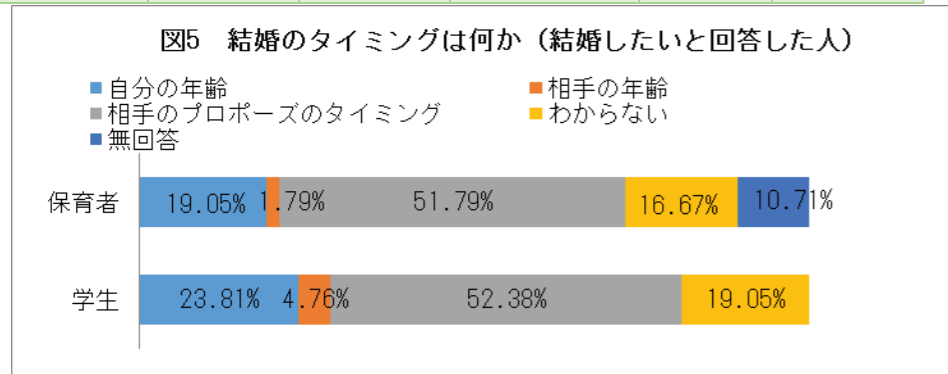


5) 結婚のタイミングは何か（結婚したいと回答した人）

保育者の調査数 168 件中、第 1 位相手のプロポーズのタイミング 51.79% (87 人)、第 2 位自分の年齢 19.05% (32 人)、第 3 位はわからない 16.67% (28 人) であった。

学生は回答数 21 人中、第 1 位相手のプロポーズのタイミング 52.38% (11 人) 自分の年齢 23.81% (5 人)、第 3 位はわからない 19.05% (4 人) であった。保育者、学生ともの結婚のタイミングは同じように相手のプロポーズのタイミングが大事だと考えていることが見て取れた。

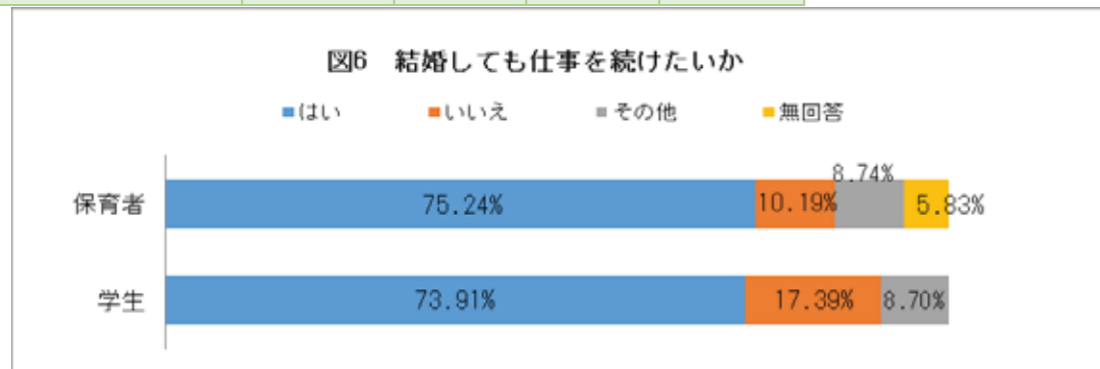
調査数	自分の年齢	相手の年齢	相手のプロポーズのタイミング	わからない	無回答
保育者(人) n=168	32	3	87	28	18
学生(人) n=21	5	1	11	4	0



6) 結婚しても仕事を続けたいか（結婚したいと回答した人）

保育者の調査数 206 件中、第 1 位はい 75.24% (155 人)、第 2 位いいえ 10.19% (21 人)、第 3 位その他 8.74% (18 人) であった。学生は回答数 23 人中、第 1 位はい 73.91% (17 人)、第 2 位いいえ 17.39% (4 人)、第 3 位その他 8.70% (2 人) であった。保育者、学生ともに 7 割以上が結婚しても仕事を続けたいという回答であった。また、その他の回答の中には、パートなどになって保育者を続けたいというものもあった。

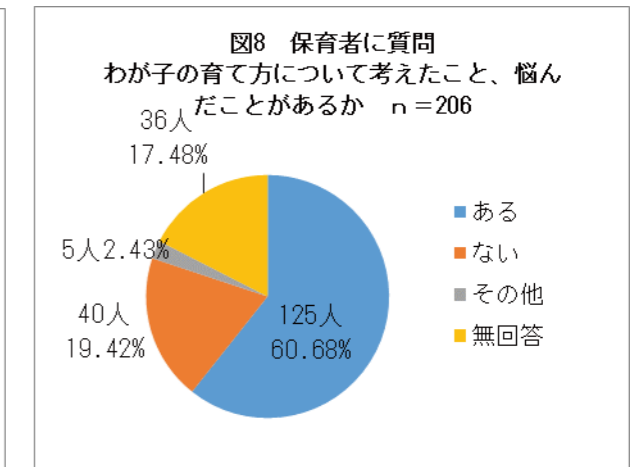
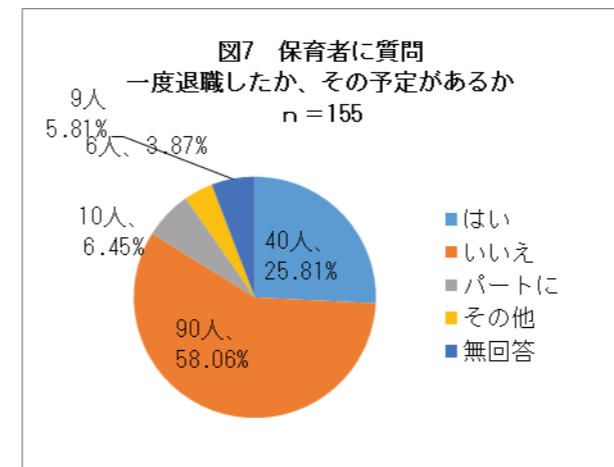
調査数	はい	いいえ	その他	無回答
保育者(人) n=206	155	21	18	12
学生 n=23	17	4	2	0



7) 保育者に質問：一度退職（育休・産休をのぞく）したか、その予定はあるか（保育者のみ）

保育者の調査数 155 件中、第 1 位いいえ 58.06% (90 人)、第 2 位はい 25.81% (40 人)、第 3 位パートに 6.45% (10 人) であった。結婚出産後に仕事を継続している保育者は 6 割弱いることが理解できた。

仕事を退職することを選ぶ女性も 2 割強いる。しかし、少数であるが、時間に融通が利くパート勤務を選び保育者を継続している人がいることがわかった。



8) 保育者に質問：わが子の育て方について考えたこと、悩んだことがあるか

保育者の調査数 206 件中、第 1 位ある 60.68% (125 人)、第 2 位ない 19.42% (40 人)。第 3 位は、無回答 17.48% (36 人) であった。保育者も 6 割以上わが子の子育てには悩むことがわかった。

9) その他（記述式）

①保育者を継続するために

ア配偶者

- ・仕事への理解、家事への参加、分担、協力が重要。仕事について理解して欲しいです。長時間の勤務になってしまう事も多いので、そういう事をわかって欲しいと思います。
- ・家族に負担をかけすぎているか常に考えている。後ろめたさもある。

イ預けられる場所

- ・実家や保育施設など子どもを安心して預けられる場所がなければ継続は難しいと思う。

ウ仕事の量、変則勤務

- ・持ち帰りの仕事が多いので、家事育児との両立ができるかが不安。どちらかが、おろそかになってしまう。
- ・自分が早番や遅番勤務の時、配偶者に理解してもらい、家事育児を手伝ってほしい。
- ・周りの先生方は仕事をしながら家事育児をしているが、はたして自分にもそれができるのか今の段階では難しいのではないかと思います。

エ職場の環境

- ・結婚しても保育者を続けたい。職員同士も協力して支え合っていけばよいと思う。
- ・子どもの学校行事や病気の時に休める環境が必要。

オその他

- ・子どもが小さい時（1～2歳位）は、自分の子どもを預けて他人の子どもを保育する事にとても抵抗がありましたが、子どもが（下の子）幼稚園に入った位から、保育士ではない職種につき、徐々に社会復帰しました。今後、保育園での勤務時間が延びると共に夫と子ども達の仕事についての理解は必要だなと思っています。
- ・仕事と家庭の両立は大変で正直休みたいと感じる時もある。しかし、仕事にはやりがいを感じており達成感や充実感もある。
- ・仕事、母、妻、嫁、全てをこなすのはとても大変。それでも走り続けてきました。子どもはそんな親を見

で不満を持っていたかもしれないですが、何とか大人になってくれました。

- ・仕事を辞めたのは、園長の考え方と合わなかったため。また、他の仕事も経験しておきたいと思ったからです（20代前半の頃）。
- ・夫の転勤で引っ越すため一度退職し、新しいところでまた働く予定です。
- ・自分の子どもは自分で育てたいと思って退職しました。

(2) 「子どもを産みたい時と産める時の女性の体で理解したいこと」講演会

表7 「子どもを産みたい時と産める時の女性の体で理解したいこと！」5会場にて講演会 日程表

NO	月日	時間	場所	住所	電話	参加人数
1	1月9日(月) 成人の日	10時~12時00分	蘭のいえ助産院	焼津市小屋敷 214-1	054-626-8603	16人
2	1月12日(木)	18時~20時00分	ゆたか保育園	島田市若松町 2538-1	0547-35-1176	41人
3	1月19日(木)	18時~20時00分	たかくさ保育園	焼津市坂本 449番地2	054-629-5430	32人
4	1月20日(金)	18時~20時00分	若草保育園	静岡市駿河区西脇 636	054-282-3389	28人
5	1月29日(日)	10時~12時00分	八幡野保育園	伊東市八幡野 1189-170	0557-54-2700	32人

図8 講演会ポスター（第1回蘭のいえ助産院）



写真1 赤ちゃん人形を抱く学生（蘭のいえ助産院）



表8 講演会タイムテーブル（蘭のいえ助産院）

時間	進行	注意事項
9:30	蘭のいえ集合	待望前守、各自持参（筆記、現金、現金、制服）
9:40	1階および4階の準備	受付（タイムテーブル・聞き取り記録用紙・鉛筆）
9:50	会場へ集合	
	会場着（スーツ）	会場設営（マイク、椅子、受付）
セッティング※私物は隣の部屋に、貴重品は持参		
9:55	開場	受付開始 スタッフの携帯電話のオフも確認
10:00	開演 始まりの挨拶（担当者）	
10:10	前田教授（助産師）の講演	
11:20	前田教授（助産師）の講演・質問コーナー	
11:30	前田教授（助産師）の講演・質問コーナー終了	
11:35	先輩たちへの聞き取り 開始	
11:55	先輩たちへの聞き取り 終了	
12:00	講演会・先輩たちへの聞き取り終了	終わりの挨拶
12:10	片付け	受付片付け、椅子片付け、清掃
12:30	解散	奮闘え

写真2 前田教授講義内容から（母性の発現について）



写真3 女性の体について様々な質問が出る（ゆたか保育園）



写真4 車座での講演会（たかくさ保育園）



写真5 講演会に理事長も参加（若草保育園）



写真6 聞き取り調査風景（八幡野保育園）



(3) 保育者聞き取り調査

1) 講演の内容「自分のライフプランについて」

①20歳代女性

- ・まだパートナーはいませんが、いないからなにもできないのではなく、いないからこそできることもあるので、今から安全に子どもを産める健康な身体をつくろうと思った。
- ・出産は早い方が良いという話はよく聞いていましたが、まさか26歳頃がピークだとは知らず驚きでした。30歳くらいに1人目を産めばいいかなと漠然と考えていましたが、もっと早くした方が良いのかなと思い始めました。年齢が上がるにつれて、リスクがどんどん高くなるのを見て少し怖く感じました。結婚、出産なんて全然考えていなかったの、今回を機に少し考えてみようかなと思いました。
- ・私は、結婚も出産もしたいと思っていますが、まだいや、いつでもできると自分の中で思っていました。産み時というものがあることを知り、もっとちゃんと考えていかなければいけない、他人事じゃない、パートナーを見つける事に積極的ではなかったのですが動いていこうと思いました。
- ・ライフプランを考えたくても業務が多忙でなかなか出会いがないのが悩みです。

③30歳代女性

- ・自分自身、まだ自由にしたいという思いから、まだ結婚も出産ももうすこし後で…と思っていたけれど、やはり適齢期もあるので、自分自身の事をもう少し真剣に考えていきたいと思った。又、周りにもたくさん独身女性がいるので、この話を伝え広めていきたいと感じた。
- ・妊娠について今まで知らなかった知識をたくさん学ぶことができました。高度不妊治療を経験されている方の映像を見て決してメリットだけではないことを聞き、知らないことばかりなのだ改めて感じました。

- ・娘が2人いるので、これから大きくなっていく中で、こういう話も年齢が来る時に母子話し合いができたらいいなと思いました。女性だけのことではないので、男性にも聞いてほしい内容だと思いました。

④40 歳代女性

- ・女性の体は複雑であることを改めて感じました。何よりも健康が妊娠にも今後の人生にも大切なのだと思うと、子どもの時期から大切にしていける事が健康な体、また自然な妊娠また少子化の歯止めになっていくことにも繋がるのではないかと思いました。
- ・子どもを産むということは実は簡単なことではなかったのですね。問題なく産めた私は幸せなのだ今頃知りました。家庭でも話題にしてみたいと思います。また、園でも保護者等との会話の中でも伝えていけたらと思います。今でも私も知らなかったことなのできっと知らない人は他にたくさんいると思うので伝わっていくといいなと思います。
- ・今の時代、簡単に子どもが生まれて来る事が当たり前でないと感じていましたが、まさしく講義の内容は、人生設計の考えの甘さが自分自身の将来を追い込んでいって来るように思えました。
- ・子どもを産むには、パートナーがいた上でのこと。私の周りでは相手が欲しくてもできない人がたくさんいる。そういう方のサポートをもっとしていかないと出生率は増えていかないのではないかと。とくに保育士はパートナーを見つける機会が少ない気がする。

⑤50 歳代女性

- ・子育て中の母親への理解が深まりました。保育園全体が子育て中の母親へのケアをさらにしていかなければならないと思うことが分かりました。
- ・子育ても終わった私ですが、あらためて勉強になりました。今日のお話を自分の娘達に話し手助けをしていけたらと思いました。
- ・妊娠事情がこんなに深刻になっているとは思ってもいなかったのを改めて認識の甘さを感じました。保育の仕事にたずさわっていくにあたり、保護者の相談相手にもなっていけたらと思います。

⑥60 歳代女性

- ・私は60代です。20代で結婚出産は当たり前の事だと思っていました。昨今の風潮で女性の地位の向上などで結婚や出産年齢の遅れがあり、若い学生達はもちろんですが様々な方法で伝えて欲しいと思います。

⑦まとめ

ライフプランの視点が年代よって変化しているため以下のように年代別にまとめた。

20 歳代：自身を考える。漠然としていた結婚出産が実は今がとても大切な時期であることがわかり、ライフプランを立てようと準備を始めた。それにはパートナーが必要なことも見えるようになってきている。

30 歳代：視点が2つに分かれた。①不妊の問題を抱えやすい年代に入っていることを理解し、早急にライフプランの見直しを考える場合。仕事が充実し結婚出産を少し先にと考えていたが、年齢的に不妊率が上がることも理解し高度不妊治療が気になり始めた。②結婚出産を経てわが子にも伝えたいと考えた場合。

40 歳代：視点が3つに分かれた。①結婚出産を経て改めて適切な時期があることが理解でき少子化の問題が理解できるようになった場合。②ライフプランを考えていないまま適切な時期を逃し振り返っている場合。③周りの保育者に適切な時期に妊娠出産ができるようにサポートしたいと考える場合。

50 歳代：視点が3つに分かれた。①近年の不妊の問題を理解し、出産適齢期を迎えたわが子に教え手助けしたいと考える場合。②妊娠を迎える保育者のサポートをしたいとする場合。③保育園全体をふまえ、個々の職員のライフプランについて考えていこうとする場合。

60 歳代：妊娠結婚は20代が当たり前であると認識していたが諸事情でそうでない時代に変化した。この問題を学生にも考えていって欲しいと考える場合。

(4) 学生の感想（抜萃）

子どもの産み時というのは、男女共にあるものであるけど意外と世間で無理解だということと、社会で重要視されていないことを知りました。中には、「結婚のあてもないのに子どもが何人欲しいと考えている女性はどうかと思ってしまう。」という人もいます。

男女の関係構築の先に結婚、子どもを設けるといふ流れはあるとはいえ、妊娠出産に可能な時期が限られている以上、今から自分のライフプランを考えなければならないのではないかなと思いました。

今回の事業は保育者が対象ですが、保育者以外の人の多くの人にも理解して欲しいです。

4 政策提言

保育者のライフプランについて様々な本事業から導き出された結論を述べていくことにする。

今回の様々な取り組みから、保育者も学生も20歳代～30歳代で、ほとんどの人が結婚をしたいと望んでいること、また、その先に子どもを産み育てることも視野に入れていることがわかった。

以下にその結果を踏まえてまとめることにした。

① 妊娠出産についての教育実施の必要性

女性の体と妊娠（女性が差別と意識しないことを前提に）について理解するための教育体制強化が大切である。いずれ結婚し子どもを儲けたいと望んでいても、20歳代の中盤が出産するのに最も適した体の状態であることを知らなかったという意見が多かった。保育者たちの学生時代に、妊娠出産についての教育はほとんどされていなかったようだ。そのため、社会人となる前に妊娠出産についての講座を受講させ、「生物学的な見地」からの妊娠出産の仕組みを理解させていかないと、子どもを産む時期を逃し妊娠出産について女性が苦しむことになることがわかった。現実には40歳代になりその現実を目の当たりにしている。

また、理解した保育者は、子どもの出産年齢を考えて結婚時期を考えていきたいと思っている場合も多かったことから、妊娠出産の適齢期についての学びは重要となると考えられた。

② 女性社会ならではの問題、出会いの場の設定、相手の「性格」が理解できる取り組みが必要

これは、直接結婚要因の向上に寄与すると考えられる。仕事をしながら漠然といい人がいたら結婚したいと思いつつも、女性の職場ということで男性との出会いの場が少ない。とくに、アンケートの結婚相手に重視しているのは「性格」との結果から、出会いがあるだけでなく、ある程度、相手の「性格」がわかるように向かい合える関係まで導き、慎重に結婚相手と見極められる時間が必要であると考えられた。例えば、様々なワークショップやグループ交際などで「性格」が知れる取り組みを企画していくことが有効である。

③ 配偶者の理解と育児に対する社会意識改革

これは、夫婦の協働力の向上に寄与すると考えられる。夫婦で、保育者は保育業務の変則勤務（早番や遅番勤務）のあることや持ち返る仕事があるなどを理解し、家事育児との両立ができるようにサポート体制を構築する必要がある。保育業務内容に後ろめたさを感じるというのは社会の意識改革が重要となる。

例えば、配偶者に保育現場環境の現状を理解してもらうために、家庭で職場の大変さを説明するだけでなく、保育者の仕事現場を直接見学してもらうなど具体的な取り組みが必要となってくると考えられた。

④ 保育者の職場環境整備

これは、保育施設長の職場環境改善リーダーシップ力だと考えられる。保育業務は多忙である。自宅への持ち帰りの仕事が多く子どもをゆっくり見られない。子どもや病気の時に安心して休めるための職員サポート体制をつくっていかなければならない。また、保育者が安心して産み育てられる、福利厚生の利用しやすい職場環境を構築すること。つまり、育休や産休が取得しやすいように、加配保育者や産休・育休保育者の確保が非常に重要な課題となってくる。

私の子どもたちがふるさとと思える静岡をつくるプロジェクト	
静岡福祉大学 社会福祉学部 西尾ゼミ	
参加学生	尾崎 汐莉 望月 敬介 栗田かすみ 森 加津美 高村 優奈 湯田 彩乃 松本紗也佳 柴田 萌 奥山 祐平 澤木 理紗 柴田 帝学 芹澤 秀和 増田 光佑 村瀬 比呂
指導教員	西尾 敦史

1 目的

少子化に影響を与える結婚、出産、子育て等に関する私たちの意識は、将来に向けての「しごと」と「暮らし」をどうつくっていくかという自身のライフデザインと、このワークライフバランスを実現するための社会の支援のあり方と密接に関係している。次世代、すなわち「私の子どもたち」が暮らす地域社会をふるさとだと感じられる循環をつくり出すカギとなる要素を「少子化突破戦略の羅針盤」の6つの地域力を通して考え、さまざまな世代と対話し、政策の提言につなげたい。

2 実施内容

(1) 若い世代の将来のライフデザインに関する調査 (2016年12月実施)

- 1 対象 静岡福祉大学・社会福祉学部学生 県内高等学校2校の生徒
- 2 回収数 468人 (高校生176人、大学生292人)

(2) インタビュー調査

- 1) 対象：親または祖父母世代 (静福サロン参加者 60歳代～80歳代) 15人
- 2) 実施日時：2016年10月25日 (火) 午後1時～2時
- 3) 場所：静岡福祉大学・地域交流センター
- 4) お聞きした内容：①基本情報 ②誕生 ③幼少期 ④小学校時代 ⑤中学校時代 ⑥青春時代 ⑦仕事のこと ⑧生活のこと ⑨恋愛のこと ⑩出産・子育て ⑪自分と世の中のこと ⑫次の世代へ・大学生に伝えたいこと

(3) 沖縄子育て支援フィールドワーク

合計特殊出生率が日本一高い沖縄県 (1.94) を訪問し、生活感覚や政策について学び、次世代、「私の子どもたち」が暮らす地域社会をふるさとと感じられる循環をつくり出すカギとなる地域生活環境、人間関係から学ぶことを目的として実施。

- 1) 行事名 もちつき大会 (糸満公設市場)
- 2) 主催 ボランティア応援センター ふらっと (糸満市社協) 糸満市中央市場商店会
- 3) 協力 前端自治会・食生活改善推進員協議会・オジサンクラブ・静岡福祉大学学生
- 4) 日時 2016年12月26日 (月) 11:00～13:30



(4) ライフデザインフォーラム

ライフデザインを意識できる「ふじのくに人生ゲーム」(仮称)の提案(学生)と意見交換

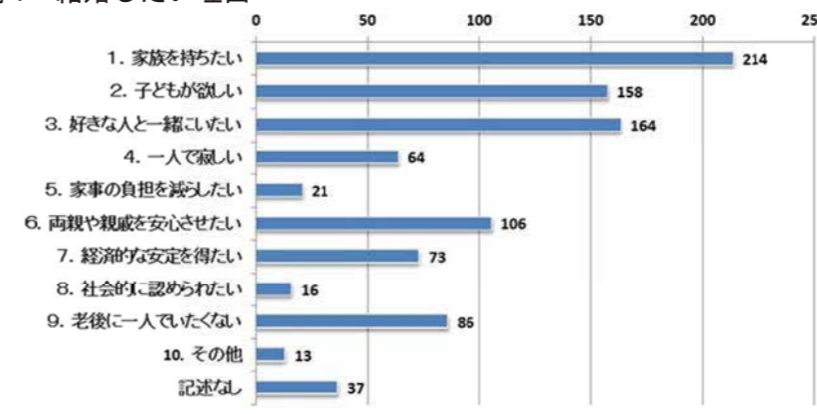
- 1) 日時 2017年2月3日 (金) 午後2時～4時30分
- 2) 会場 シズウェル (静岡県総合社会福祉会館) 701号室
- 3) コメンテーター 窪田亮 (静岡県社会福祉協議会) 鈴木智子 (静岡時代代表) 小笠原快 (江東区南砂子ども家庭支援センターソーシャルワーカー)

3 分析、課題等 (事業実施により明らかになったこと)

(1) ライフデザイン調査の結果概要

恋愛・結婚

問1 結婚したい理由

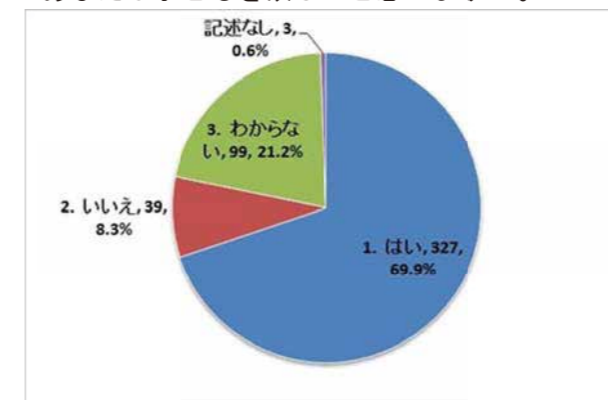


問2 理想の結婚相手を有名人に例えると・・・(3人以上名前が挙がった人)

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 新垣 結衣 (10) | 櫻井 翔 (3) | 安田 章大 (3) |
| 有村 架純 (4) | つるの 剛士 (4) | 坂口 健太郎 (3) |
| 北川 景子 (3) | フジモン (6) | 三浦 翔平 (3) |
| 本田 翼 (4) | 星野 源 (3) | 山崎 賢人 (4) |
| | りゅうちえる (3) | |

出産・子どもをもつこと

問3 あなたは子どもを欲しいと思いますか。



問4 問3で「はい」と回答した人(n=327)の理由

多い回答：「子どもが好き」237 (72.5%)、「子どもがいると楽しく幸せだから」161 (49.2%)
「自分の親に孫の顔を見せたい」140 (42.8%)、「好きな人の子どもがほしい」113 (34.6%)

問5 問3で「いいえ」と回答した人(n=39)の理由

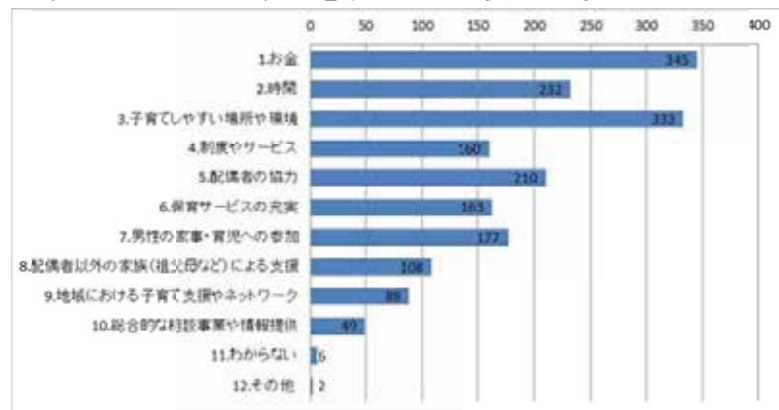
多い回答：「基本的に子どもが好きではない」13 (33.3%)、「自分の生き方を大切にしたい」12 (30.8%)、「親になることに自身がない」8 (20.5%)

問6 子どもを持つことについての考え(n=468)

多い回答：「子どもをもつことで自分が成長できる」311 (66.5%)、「子どもがいると生活が豊かになり楽しくなる」276 (59.0%)、「仕事との両立が大変である」137 (29.3%)

子育て・子育て支援

問7 あなたにとって子育てをする上で重要だと考えるものは？



問8 子育てや悩みを誰に相談すると思いますか。(n=468)

多い回答：「自分の親」334 (71.4%)、「知人・友人」271 (57.9%)、「配偶者」256 (54.7%)

問9 子どもたちを安心して育てられる地域(静岡)をつくるために(自由記述)～代表的な意見

- ・子供が自由にのびのびと生きていけるような環境や場所。
- ・地域の人達とのコミュニケーションをもう少し大切にしておくこと。
- ・保育施設の増設、保育士の待遇をもう少し考えること。→人員確保→給料を上げる。
- ・不景気なんだから産めるわけがない。病院やおむつ、ミルクなどの費用負担を減らすべき。
- ・妻だけに任せず夫や周りの人も積極的に子育てを手伝う事が大切だと思う。
- ・男も女も育児休暇や産休など取りやすいようにするべき。
- ・子ども預かりサービスを増やす。相談できる窓口を増やす。
- ・住んでいる地域を自分の地元だと思えるようにする必要があります。近所でのつながりをもっと広げるべきだと思います。
- ・静岡県でも過疎化が進んでいるので、集落での住みやすい環境や都会みたいな店、バスや電車の本数などを増やすことが若者が集落にとどまることにつながると思う。

(2) インタビュー調査の主なまとめ

<p>●子ども時代の学校・地域</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・世の中の変化：物が豊富になった。携帯・習い事が当たり前になった。 ・昔は休み時間等が充実していなかったため競争心の強い生徒が多かった。 ・学校へ行けない子どももいた。子どもは労働力だった。 ・家の手伝いをするのは当たり前で、自分より年下の子どもがいたらお守りをしていた。子守りは身内だけでなく近所の子守りもした。近所同士の付き合いが深く、大勢の中の広いつながりがあった。 ・今の時代はとて子どもが貴重になってきたと感じている。 ・マンガに出てくるような「ガキ大将」が当時存在し、みんな従っていたしガキ大将も面倒見がよくみんなをまとめてくれていた。今を生きる子供より自然との触れ合いがとて多かった。 ・昔は近所の関係、つながりが強かった。お互いに色んな情報を知っていた。外で遊んで近所の方の家でお風呂にも入り、ご飯までもらって帰ってこなくてもどこかのお宅にいるなという安心感があった。 ・部活で風邪が流行った時、顧問の先生の家みんな泊めてくれてとてお世話になったそう。今の先生は仕事が増えて大変だ。
---------------------	--

<p>●男女、家、家族の意識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今は男性が優しい。しかしどんな時代になってもある程度男性をたてることが重要！タンスなどの嫁入り道具が昔はあったが今はない。受け継がれていくことが減ってきている。 ・父親がとて厳しく母親が優しく接するのが昔の形だった。(父親は絶対) ・今とは違い、妻と夫が対等ではなく、夫に従うという形だった。姑にお金をすべて渡しひたすら働いたと言っていた。 ・昔は男の人が強く、男の人に従い、女の方は家事に専念するという傾向があった。 ・昔は男性が強く、女性が優しかった。(男尊女卑) ・今は女の人ひとりで生活する人も多く、女性の社会進出が進んでいる。 ・子どもの家族の中で役割がある。→必要とされているという有用感があった。今はそれがない。 ・自分の部屋はなかった。川の字で寝た。
<p>●恋愛・結婚</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当時はお見合いや知人からの紹介で出会い・結婚。 ・近所の方の紹介・適齢期になると相手を探してくれるおばさんがいた。 ・当時彼には許嫁がいたが、彼が両親と話し合い自分を選んだ。 ・今は結婚をするときに将来を見据えて(これからの暮らし、給料など)結婚をするが、昔は今ほど先に事を考えずに結婚していた。 ・結婚は今まで育ってきた環境がそれぞれ違う赤の他人同士と一緒に生活するので、どちらかが我慢をしなくてはならない。お互い許しあったり認め合ったりしなくては一緒に生活は出来ない。相手を大切にすることが大切。我慢も限度があり、仲良くなれる程度もある。 ・今はモノや情報が多すぎて探すのが大変(自分に合ったものが分からない)絞るのも大変。自己決定を求められる。昔は決まったルールがあった。
<p>●出産・子育て</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・名前の由来：お寺の和尚さんがつけてくれた。名付け親がいて、親が名づけないことも多かった。 ・気づいたこと：親のありがたみ。嬉しかったこと：娘が子育ての大変さや感謝の気持ちをくれたこと。 ・もし、子育てをすることになったら、できるだけ手作りの料理を作った方がいい。子どもは親の姿を見て育つから、子どもにやってほしくないことは自分もしない方がいい。 ・子どもがいると自分も成長することができる。そして、自分の生活の場を広げることができる。また、子どもができると、強くなる。(親育ち) ・子どもは親を見て育つため、食事はちゃんと作ってあげることが大切。コンビニで買って食べて育つとその子どもも食事を自分で作らなくなる。
<p>●[次の世代へ](大学生に伝えたいこと)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・失敗しても気持ちを切り替えて何度でも取り組むこと→若いうちは失敗しても大丈夫。・「大変なことはあると思うけれど、生きていれば楽しい！」 ・学校の友だちは一生の友だちだよ。 ・学校に行けることは幸せなこと！若いときは困難に乗り切れる！頑張って！ ・若い人は都会に憧れる等活動的な一面もあるが、人生を長期的に見ると「のんびりできる」という静岡県の長所が活きるの若い人に対して「安心できる環境の良さ」をPRすると、静岡県の若者の在住定着に結びつく。 ・若者に足りない：ありがたいという気持ちが少ない。我慢できるといい。

(3) 「沖縄子育て支援フィールドワーク」から学んだこと

人口動態統計（2015 厚生労働省）によれば、全国の出生率平均は 1.46、静岡県が 1.54 に対して、沖縄県が 1.94 と全国でもっとも高くなっている。その理由として、暮らしやすい気候、女性の就業率の高さ、認可外を含めた保育園の多さ、コミュニティにおける「ゆいまーる」（共助）精神、出産・育児を支援する地域文化の存在など、子どもを産み育てやすい環境が指摘されている。一方で、失業率の高さ、離婚率の高さ、ひとり親家庭の多さ（共に日本一）などに象徴されるように、子どもの貧困が沖縄社会の課題として顕在化している。

今回は、地域経済の衰退、地域社会のつながりの希薄化のなかで、子どもの居場所をつくるきっかけづくりのイベントにゼミ学生が参加協力するなかで、感じ学んだことが多くあった。

- ・地域の方がたが集いやすい場所の力（公設市場の中の広場）があった。
- ・住民が子どもたちを支えようとする力（大きくは調理を担当する女性ボランティアと、オヤジの会を中心とした男性ボランティア）が大きい。オヤジの会には内地からの移住者も多く、糸満地域の助け合いの大きな力になっている。
- ・弱まっている地域文化を再構築させるきっかけになる（三線で民謡を歌う老人の参加、糸満方言で読みきかせをする女性の存在など）。
- ・親世代、祖父母世代だけでなく、大学生世代（子どもにとってのニイニイ、ネエネエ世代）が参加することが、自然な交流や関係づくりをすすめる上でなくてはならない存在であること。
- ・イベント全体をとおして、学生はそれぞれ役割をみつけて、動き、子どもたちとかかわりを持ち、ボランティアとコミュニケーションをはかりながら、楽しく活動を行うことができた。こうした経験は静岡の大学生活の中でも機会が少なく、貴重な経験となった。
- ・地域活動共通に言えることではあるが、サンマ＝「空間」「時間」「人間」の要素が必要で、とりわけ余裕のある「時間」があることが子どもにとっての生育環境として重要ではないか。

(4) 結婚・子育てについての大学生の考え方（問題意識）

①結婚について（自己決定と社会）

結婚についての今と昔の違いからいうと、「選択肢がありすぎて、個人の選択にまかせられすぎて、決められないのでは？」という問題を設定して、議論しました。昔は“いいなずけ”だったり、自分の選択の余地は少なかったけど、今は自己選択、自己決定にゆだねられる。しかし、これまでの教育が自己決定力を強めるようなものになっていなくて、指示待ちになったり、言われたとおりにやる、与えられるものだという認識が強い。

②結婚のイメージ（社会意識）

結婚については、いいイメージがなく、しゅうとめ、マザコン、自由が束縛される、離婚などマイナスイメージが大きいので、あえて結婚という選択をしなくなっている。しなくても経済的に自立していくこともできるし、というように、自己決定力と現実の社会の意識とのギャップが大きいのではないかという議論になっている。

③今と昔の結婚についての考え方の違いについて（ゼミでの議論）

- ・自己決定力の不足→選択肢の幅が広いから自己決定が不足する
 - 「昔」結婚するしかない 家と家をつなぐ手段（社会のネットワーク）
 - 「今」その人を知ってから考える
 - 夢を見すぎている（理想が大きいため、現実がついてこない）この人と一生暮らせるか、もっといい人があるのでは？（上を求める）タイミングと判断が難しい。
- ・結婚に対してマイナスイメージ → 結婚が必ずしも幸せとは限らない。
 - 結婚＝幸せ（重荷）面倒（ストレス）、大変、お金がかかる、束縛、負担が多い。
 - 相手のことが見えすぎてしまうと幸せが下がる。
 - 結婚に×が付くのは嫌だ（借り結婚制度を作ればいい）（×はマイナスイメージなので

は？他国は事実婚が多い一方、日本は戸籍上の事を気にする)

誰かと一緒にいることに絶えられないのでは？結婚して一人前という時代が終焉。

- ・地域とのつながりが違う→「昔」コミュニケーションが濃い（つながりが長い）
 - 「今」地元から離れる為、関係を作る前に転居した所で子育てが再スタート（つながりが無い所から）地域とのつながりが無い+地域とつながりたがらない
- ・言葉の責任や自己責任がない→「昔」家の為に離婚できない「今」離婚が珍しくない
- ・できちゃった婚が多い（1/3 位の割合）既成事実を作り相手を逃がさない、「子供がいるのは」結婚の後押しになる、決定打。結婚が重いのではなく、嫌だから離婚して次へという人が多い。昔より責任感を持つ事自体が減っている。
- ・結婚しなくても一人で生きていける人もいる→社会の変化、文化の変化
- ・自己決定の意識の問題→選択肢がありすぎて意識が整っていない。

④子育て支援について

子育て支援については、「昔は名付け親など地域に親がいっぱいいて、子育ての助けが大きかった。今はお母さんの責任負担が大きすぎる、スーパーお母さんが求められすぎているのでは？」と考えてみて、これらの問いには十分な時間がなかったのですが、昔の地域社会に戻ることは難しいので、やはり公共の支援が必要で、「保育園義務教育化」（古市憲寿）などの議論が参考になると考えている。

4 政策提言（自治体への事業提案）

【提案 1】地域の居場所（子どもを含む多世代が参加・交流・相談できる場）を広げる

ふれあいいきいきサロン、コミュニティカフェ、子ども食堂、さまざまな呼び方があるが、地域社会がつながりを結び、支える力となるためにも、従来からの地域組織に限らず、新しい関係性を創り出すことができる場をつくる。自治体（公助）の役割として、地域社会（共助）において活動が促進されるインキュベート機能として、自宅開放や空家・空き店舗、空き教室などの活用推進、助成制度の検討・再構築をすすめることが期待される。

【提案 2】『ふじのくに人生ゲーム』（仮称）の教育場面（学校・地域・家庭）での活用



若者のコミュニケーションツールとして、活用されている「アンゲーム」(<http://www.saccess55.co.jp/kobetu/detail/ungame.html>)（次頁マップ左上に質問例）アンゲームの質問を組み込んで、中学生・高校生がこれからの人生をデザインすることを考えられる楽しいボードゲーム。大きな転機となるライフイベントは、「就職」「恋愛」「結婚」

「出産」「子育て」「失業」「離婚」「余暇」。人生の移動は一応、電車として、ふじのくに（静岡県）県内を移動しながら、県内の出生率など、トピックを織り交ぜながら進んでいく。

出発は浜松、ゴールは温泉の熱海。ゴールすると、通過してきたライフイベントでの選択の結果の8つの札（フダ）をもつことになるので、それを広げて見比べながらグループで、ライフデザインについてディスカッションできる。さあ、やってみましょう。



ライフデザインフォーラム (2.3) における意見・提案

- ・コマをキャラクター的なものに。
- ・質問の仕方をもう少し簡単なものに。「就活するときに会社選びの条件は何ですか？」など
- ・空白のところには何かあるといいなあ。
- ・年代ごとにパターンつくれば対象者ごとにカスタム化できていいんじゃない？
- ・短い盤をつくって（高齢者盤）ヒアリングの材料に使える。
- ・見合いパーティ（婚活）、合コンなどで使える。
- ・静岡県の一言メモをマスにに入れていくといい。
- ・アンゲームで出てきた意見をボードに張り付ける。
- ・リアリティのある現実味のある質問をもっとラフにストレートに。
- ・マスの市町村の地域ネタを取り込んでみる。
- ・地域のこと、地域生活のこと、地域との付き合いのことを聞く質問があるといい。
- ・地元のこと、近所のこと、昔のことを聞き出せるような。
- ・県内でもらったものでうれしかったもの、出身地について知れる何かがあるといいな。
- ・ご当地キャラの使用など。
- ・同じ質問に対する他の人の意見も聞けたらいいな。

いただいた意見をもとに修正を行い、改良を加え、今後、学校・地域・家庭・合コンなど、さまざまな場面でライフデザインを考え、コミュニケーションを促進させるツールとしての普及を図っていきたい（フリーのゲーム教材としてインターネット上で提供）。

思いやりマインドを持った恋愛 (Sympathizing Love) 検定： より豊かな家族・地域・夫婦・子育てを目指して	
静岡産業大学 経営学部 菊野ゼミ	
参加学生	市川 拓臣 宇佐美幸也 大井 康平 大石 琢貴 岡村美加子 長田 夏実 後藤 拓 白井 伸幸 鈴木 辰麻 中澤 俊哉 日置 佳佑 望月 大 山下 雄大
指導教員	菊野 春雄

1 目的

「ふじのくに少子化突破戦略の羅針盤」（静岡県、2016）では、出生率に影響を与える要因に「家族・地域の絆力」「夫婦の協働力」「子育ての基盤力」の3つの地域力が、若者が将来にわたる恋愛、結婚、出産、育児にとって大変重要なポイントであることが示唆されている。この3つの力を豊かにする鍵は、「思いやり」であると思われる。若者がこの「思いやり」のマインドとスキルを恋愛の段階から持つことで、その後の結婚、出産、子育てにも相手そして自分自身を尊重し共感・協働できる「思いやり」を持ったライフデザインを設計できるようになるのではないかと考えた。そこで、本事業では、調査研究、講演、ワークショップを通してこれらの考えを検証しようとした。また、調査研究、講演、ワークショップにおいて若者の意見を分析・集約して、「思いやり」のある恋愛、結婚、出産、子育てのある地域の発展を支える行政支援を検討し、羅針盤の地域力を豊かにできる提言につなげようと考えた。

2 実施内容

(1) 大学生の恋愛行動の調査の実施

若者が思いやりの気持ちを持つことにより、恋愛、結婚、出産、育児、家族の絆、地域の絆にどのように影響をするのかを調べた。調査協力者は大学生 127 名であり、男女別の内訳は男性 57 名、女性 65 名、不明 5 名であった。年齢範囲は 18 歳から 24 歳であった。これらのデータの内、無回答などがあった 13 名のデータを削除し、114 名のデータについて分析した。調査内容は、「思いやりの意識」、思いやりを社会で実践しているのかという「思いやり行動」、「結婚」「出産」「育児」「家族の絆」「地域の絆」に対する「ポジティブなイメージ」について、評定尺度を用いて尋ねた。

(2) 恋愛診断検査の作成

大学生が自分の恋愛の態度や行動が異性にとって望ましく思いやりのあるものであるかを診断する恋愛診断、「SymLo 検定 (Sympathizing Love Diagnosis Test)」を作成した。恋愛診断検査を作成するにあたり、大学生に調査を実施した。調査では、男性 20 名と女性 20 名を調査協力者として、男性および女性の視線から見た「望ましい恋愛行動」とは何かを調査した。調査では、恋愛において望ましい恋愛行動を自由記述するように依頼した。男性協

力者には男性の視点から望ましい恋愛行動を記述するように依頼した。女性協力者には女性の視点から望ましい恋愛行動を記述するように依頼した。

恋愛行動として、知り合う行動（相手に言葉かけ・連絡先を聞くなど）、付き合うための準備行動（初めてのデートの約束・映画に誘う・食事に誘うなど）、付き合う・告白行動（相手に付き合いたい気持ちを伝える・手をつなぐ）の3つの行動について自由記述をするように依頼した。収集された記述の中から、20項目を恋愛検定を測定するのに妥当な項目として選択した。表1は、男性版の質問項目であり、女性が男性に期待する行動である。表2は、女性版の質問項目であり、男性が女性に期待する行動である。

表1 恋愛検定：男性版（女性が男性に期待する行動）

カテゴリー	質問項目
知り合う行動	・好意を持つ女性には積極的に挨拶するようにしている。
	・いきなり相手の連絡先を聞かないようにしている。
	・連絡先は自分（男性）から聞くようにしている。
	・積極的に自分から話しかけている。
	・身だしなみを気にするようにしている。
付き合うための準備行動	・女性の気持ちを尊重するようにしている。
	・女性が荷物を持っていると、男性が荷物を持つようにしている
	・二人で歩くときは、男性が車道側を歩くようにしている。
	・レストランに入るときは、男性がドアを先に開けるようにしている
	・自分に見合った店を選ぶようにしている。
付き合う・告白行動	・ストレートに自分の気持ちを伝えるようにしている
	・タイミングを計ってから告白するようにしている。
	・声をかけて手をつなぐようにしている。
	・場所や時間を十分に考えてから選ぶようにしている
	・女性の目を見て自分の気持ちを伝えるようにしている。

表2 恋愛検定：女性版（男性が女性に期待する行動）

カテゴリー	質問項目
知り合う行動	・相手の話しやすい雰囲気を作るようにしている。
	・相手が戸惑っていると、さりげなく手助けする。
	・相手が連絡先を尋ねるときは、笑顔で心掛けている。
	・話下手な人だと、女性から質問するようにしている。
	・話がつまらなくても、楽しそうな反応をする。

付き合うための準備行動	・レストランに入った時は、すごく嬉しそうな表情をする。
	・相手の考えてきたデートコースをほめるようにしている。
	・会計をする前に、自分の分を渡しておくようにしている。
	・相手を呼ぶときは、君付けを使う。
	・男性のいろんな側面をほめるようにしている。
付き合う・告白行動	・自分から手をつなぐようにしている。
	・また会いたいことを、何気なく相手に伝える
	・相手のいいところを、会話に入れる。
	・自信なさそうな場合は、話しかけるようにしている。
	・告白しそうな時は、笑顔を心掛けている。

(3) 思いやりについての講演・大学生の恋愛行動についてのワークショップ

若者同士が「思いやり」について考える場の提供をするために、「思いやり」についての講演会とワークショップを12月17日（土）に開催した。主催者としては、これらの活動を通して、多くの若者の意見を直接聞く中で、提言をより具体的に構築できないかと考えた。

まず講演会では、思いやりについて小学校をはじめいろんな場面で講演を行っている歴史コメンテーターの金谷俊一郎氏に講師を依頼して講演をお願いした。また、少子化対策の根幹となる若者の恋愛のスキルについてワークショップを開催した。このワークショップを通して、「思いやりのある恋愛」さらに「思いやりのある結婚」について若者同士で考える場として、ワークショップを企画・実施した。



図1 思いやりについての講演

平成28年12月17日 場所：静岡産業大学6101講義室
参加者：71名（男性39名、女性32名）

① 講演会

講演会では、歴史コメンテーターの金谷俊一郎氏を講師とし、「日本人なら学んでおきたい。昔の教育から学ぶ『思いやりのこころ』」と題して講演をしていただいた。講演の概要は、以下の通りであった。現代社会は昔に比べて殺伐としているといわれている。昔の人の教育や

道徳にあったと考えられる。江戸時代の寺子屋の教科書や昔の道徳の教科書に記されている内容を紐解きながら、今、日本人が忘れかけている「思いやりの心」とは何かを考えていく。この講演を通して、参加者には、思いやりマインドの重要性を考え、思いやりが恋愛、結婚、子育てなどライフデザインを豊かにし、地域力の向上につながることを考えていただくことを目的とした。参加者は71名で、内訳は、男性39名、女性32名であった。

② ワークショップ

ワークショップでは、参加者が恋愛診断検定を使って「思いやりを持った恋愛」を自己診断し、グループごとに思いやりのある恋愛を実践するためには何が重要かを話し合った。思いやりのある恋愛、結婚について話し合い、それをグループごとに発表した。KJ法（参加者同士で意見を自由に出し合い、意見を体系的に集約するブレインストーミングの手法）を用いて話し合いを行った。参加者は、37名で内訳は、男性23名、女性14名であった。



図2 大学生の恋愛行動のワークショップ

平成28年12月17日 場所：静岡産業大学 6102講義室

参加者：37名（男性23名、女性14名）

3 分析、課題等（事業実施により明らかになったこと）

調査・講演・ワークショップなどの各事業における若者の意見を集約・分析することから、以下のことが明らかになった。

(1) 大学生の恋愛行動の調査の実施

大学生を対象とした、思いやりと恋愛行動の調査を実施した。図3は「思いやり」と恋愛、結婚、出産、子育て、家族の絆、地域の絆との相関係数で示したものである。この結果から、
 (1) 思いやりの気持ちを持った人ほど、恋愛、結婚、出産、子育て、家族の絆、地域の絆に対して積極的である。
 (2) 思いやりと関係性が強く見られたのは、子育て、結婚、恋愛であった。
 (3) 思いやりと恋愛、結婚、出産、子育て、家族の絆、地域の絆との関係は、男性よりも女性の方が強いことが明らかになった。
 (5) 女性に比べ男性は、結婚について、思いやりだけでは結婚に対する関係が弱いことが明らかになった。

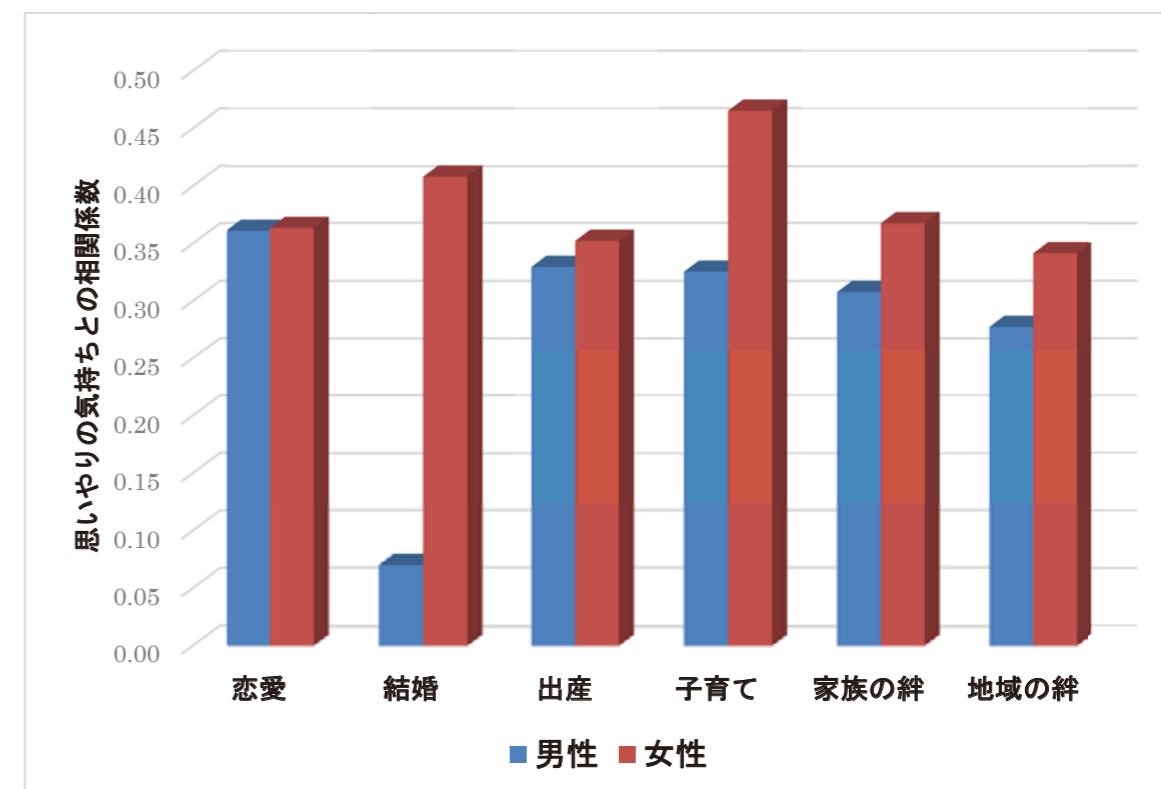


図3 思いやりと恋愛、結婚、出産、子育て、家族の絆、地域の絆

(2) 恋愛診断検査の作成

恋愛診断検査を作成することで、男女間に望ましい恋愛行動が異なることが明らかになった。表1に示されるように、知り合う行動（相手に言葉かけ・連絡先を聞くなど）、付き合うための準備行動（初めてのデートの約束・映画に誘う・食事に誘うなど）、付き合う・告白行動（相手に付き合いたい気持ちを伝える・手をつなぐ）の3つの行動において、女性は男性に対してリーダーシップを伴う思いやりを望む傾向があることが明らかになった。他方、男性は女性に対して優しさなどを伴う思いやりを望む傾向が認められた。

(3) 思いやりについての講演・大学生の恋愛行動についてのワークショップ

思いやりについての講演では、参加者から思いやりの重要性に気づいたとの意見が多かった。また、ワークショップでは、恋愛に対する興味はあるが、出会いの場や恋愛に対しての上手なアプローチがわからないとの意見も見られた。ワークショップで、男性は女性の視点から恋愛を理解することが思いやりの恋愛になることにはなるのではないかと、他方、女性も男性の気持ちを十分に理解することが思いやりを持った恋愛になるのではないかと多くの意見が多かった。

4 政策提言

調査結果やワークショップでの意見を通して、以下の政策提言を行いたい。

(1) 静岡県での思いやりのある恋愛検定の作成と実施

少子化の根本原因である恋愛の問題を解消するために、若者が恋愛の適性を診断する恋愛検定を完成する。そして、静岡県の若者に自己診断を行い、思いやる恋愛を考える機会を設ける。これを通して、相手や自分を尊重した恋愛や生き方を考える。このことがその後の、思いやりのある結婚や出産・子育て・家族・地域の絆に結びついていくのではないだろうか。

(2) 若い男女が安心して出会え、交流できる場所の提供

昔は見合いなど、安心して手堅い出会いの場があった。その場で、若い男女が安心して出会うことがあった。現在、出会いの場があるものの、若者にとっては不安なイメージがある。静岡県で若い男女が安心して出会え、交流できるような場所や制度ができないだろうか。

(3) 思いやりのある「恋愛アドバイザー」の創設

昔は、恋愛について青年団などで年長者からアドバイスをもらい恋愛を成就することが多かった。しかし、異年齢の若者の交流の機会も減少しつつある。そこで、恋愛検定の上級者が恋愛アドバイザーになり若者に思いやりのある恋愛や結婚についてアドバイスする場や機会を創設してみてもどうか。

(4) 高校や大学など学校で恋愛を考える時間を設置

学校でも社会に出てからも思いやりのある恋愛を教える場はない。巷では、雑誌などでエビデンスのない恋愛情報が氾濫している。先生が恋愛アドバイザーとなって、学校などで若者に思いやりのある恋愛を教える時間を設けてはどうだろうか。

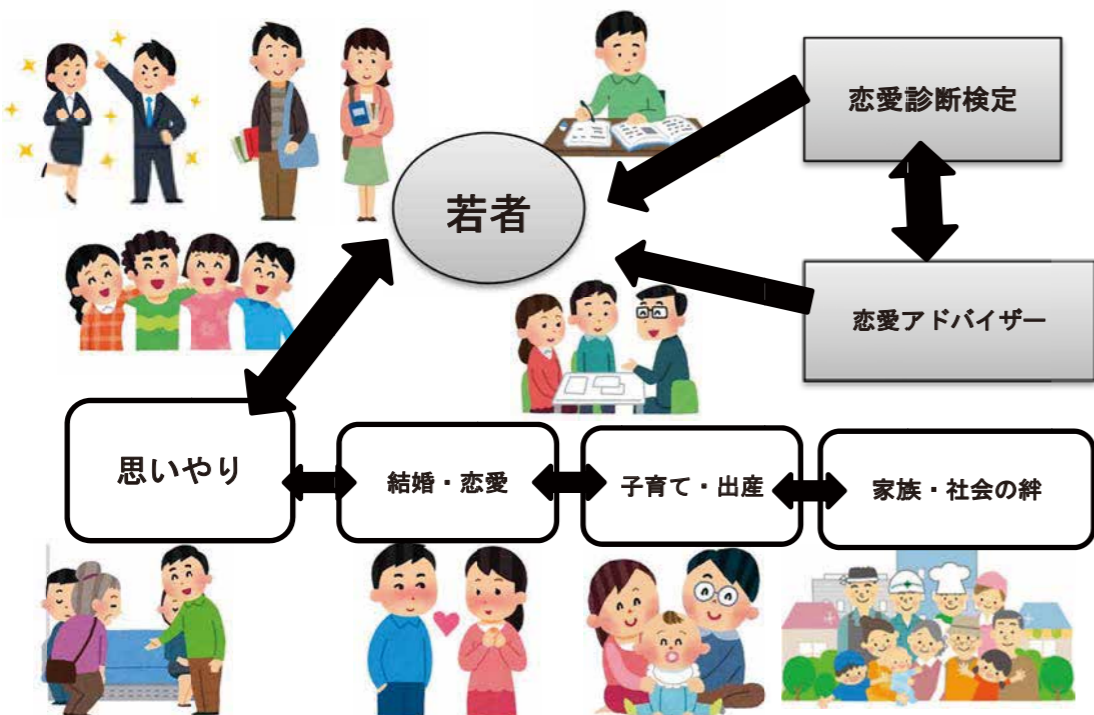


図4 「思いやり」が「結婚」「恋愛」「子育て」「出産」「家族・社会の絆」を育てる

“ふじのくにづくり” 夢の羅針盤プロジェクト事業	
浜松学院大学 浜学少子化突破戦略研究チーム	
参加学生	勝亦 彩 嘉戸 泉美 北川 一磨 徳井 瑞紀 中野 智晴 柳田 千尋 山本彩久乃 池谷 茉莉 松元 武瑠 山崎 誠司 山崎 真理子
指導教員	的場 啓一

1 目的

静岡県においても人口減少は大きな社会問題であり、その対策が急務となっている。本事業では、本県における少子化問題の克服に資するため、これから親となる若者を対象に結婚・出産・子育てにかかる意識啓発を行い、結婚等の当事者であることの意識の醸成を図った。

また、若者の価値観と地域の特性を生かした解決策を検討し、理想的な“まち”と現実の乖離を検証することによって、今後、本県がとるべき政策の方向性について、若者自らが提言を行うことを目的とした。

2 実施内容

これから就職・結婚・出産・子育てといった大きなライフデザインを目前に控えている大学生を対象として、ライフデザイン等に関するセミナーを開催し、参加者が自らのライフデザインを考える機会を設けた。

また、セミナーや大学生を対象としたアンケート調査の結果などをもとに、大学生が将来定住して、子育てしたくなるような仮想の「夢まち（空想都市）」を議論しながら創り上げる場を設け、現実社会と比較しながら、ライフデザインを考慮した“まちづくり”の重要性を考える機会を提供した。

さらに、静岡県内外の自治体に対して、ヒアリング調査や電話調査を行い、本県の各自治体が取組むべき事例の調査・研究を行った。

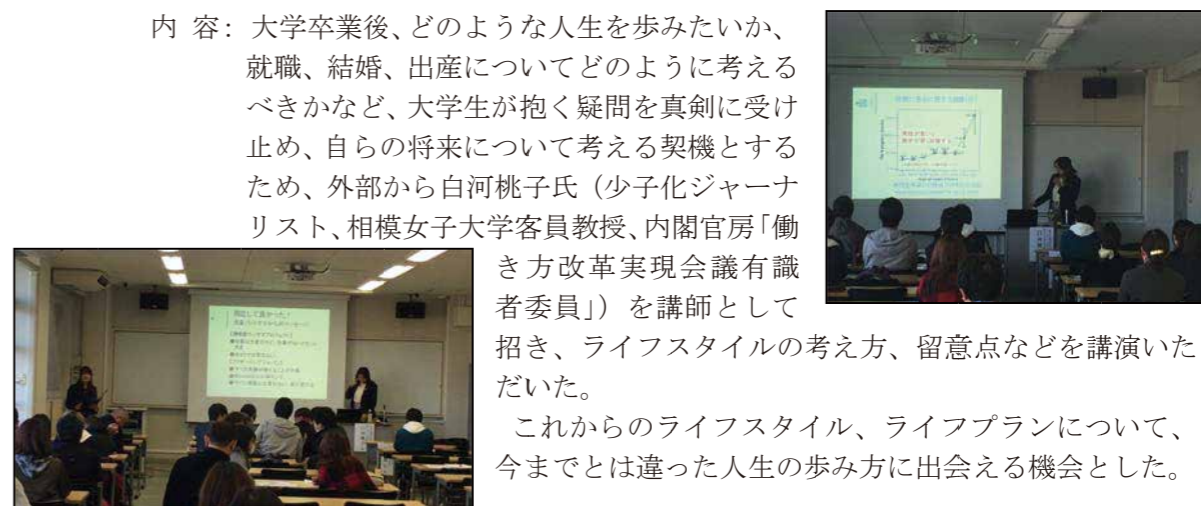
具体的な取組内容は、以下のとおりである。

① 「若者が考えるライフスタイルセミナー」開催

日時：平成29年1月26日（木）、13時～14時30分

内容：大学卒業後、どのような人生を歩みたいか、就職、結婚、出産についてどのように考えるべきかなど、大学生が抱く疑問を真剣に受け止め、自らの将来について考える契機とするため、外部から白河桃子氏（少子化ジャーナリスト、相模女子大学客員教授、内閣官房「働き方改革実現会議有識者委員」）を講師として招き、ライフスタイルの考え方、留意点などを講演いただいた。

これからのライフスタイル、ライフプランについて、今までとは違った人生の歩み方に出会える機会とした。



参加者は52名であり、自らのライフスタイルやライフデザインについて見つめ直すきっかけを与えることができた。

参加者へのアンケートでは、有意義であったとの声が多く、共働きの重要であることが分かった、自らが失敗を恐れず、働き方を決めていかなければならないなど、これから自分たちの歩んでいく道について、真剣に考えることができた。

②「夢の“まち”を語るワークショップ」開催

日時：平成29年1月25日（水）、9時～10時30分



内容：大学生が将来、仕事に就き、結婚して子どもを産んで育てるには、どのような“まち”が理想であるのかをワークショップ形式で意見を出し合い、検討した。27名の参加があり、ワークショップのテーマを「結婚し、子どもを育て、住み続けたい理想の街とはどんな街か？～夢のまちをつくらう～」とし、次の5点を議論の中心にして、検討を行った。

- ア) 街にはどのような公共施設、民間施設があれば良いか
- イ) 街の生活環境として望むもの
- ウ) 行政（県や市）に望む施策
- エ) 住民同士の関係
- オ) 行政（県や市）と住民の関係

ファシリテーターは、本事業に参加している学生が務め、参加者に積極的な発言を促し、短時間であったが様々なアイデアや意見が出された。

理想の夢の“まち”として、住民が互いに助け合い、文化スポーツ施設が充実し、誰もが多くの選択肢の中から自分の好みに合った生活スタイルが実現できる社会で、職住近接のコンパクトな“まち”ができた。

③ 県内他市町へのヒアリング調査

ア) 静岡県賀茂郡河津町役場

日時：平成28年11月16日（水）

担当：嘉戸泉美、山本彩久乃、山崎誠司

調査の知見や感想など：

河津町の高い合計特殊出生率の要因は、①分母となる女性人口が少ない、②伊豆半島の交通の要衝であり、他の市町に勤務する公務員などが移住してきた、③土地区画整理事業により、居住可能な土地が増加した、④伊豆半島の他の市町に比べて、平らな土地が集中して広く存在していることが挙げられた。地形的な優位性がある一方で、高校や大学が町内に存在しないこともあって、若者が町外に出て行ってしまうことは避けられない現状である。しかし、子育て

て世代のニーズに答えるため、複合的託児施設の建設が進められていた。

ビルやマンションの高層建築物はなく、静かな雰囲気の中で、坂も少なく歩きやすい地形だった。役場の職員と住民の関係も良く、役場と住民が深く関わられる関係が構築されていると感じた。人口が少なく規模の小さな自治体であるが、強みとして、役場が住民それぞれの意見をしっかりと聞ける体制が整えられている。

他の近隣市町も同様であると推察されるが、河津町を含め周辺市町の抱える問題（人口減少、学校や産婦人科がない、交通便が悪いなど）について、小規模市町単独では解決するには限界があると思われ、周辺市町間で助け合い、連携して取り組んでいく必要がある。

イ) 静岡県熱海市役所

日時：平成28年11月22日（火）

担当：山本彩久乃、山崎誠司

調査の知見や感想など：

公園などのハード面の充実と住民サークルによるボランティア活動が印象に残った。公園については、観光の拠点と地域の幼児（0～2歳児）の遊び場確保という二面性を持たせていた。また、住民サークルによる児童室の管理にみられる地域住民の子育てに対する取組は、子どもの親にとって貴重な機能であると感じた。一方で、物価や地価が高い現状があり、所得の低い世帯にとっては、この地域での子育ては苦勞する面があるのではないかと考えられる。

JR熱海駅周辺は観光客が非常に多く、賑わっていたが、道が狭く、坂が多いため、歩き難い地形である。平らな道がほとんどなく、子育てには不向きな地形となっている。都会では若者が多く集まりそうなカフェにも、高齢者が多く、人口の高齢化を直に感じた。市役所の担当者から、熱海は退職後移り住んできた住民が多いとの説明を受けたが、これも人口高齢化の一因である。

ウ) 静岡県駿東郡長泉町役場

日時：平成28年11月29日（火）

担当：勝亦彩、徳井瑞紀

調査の知見や感想など：

県内で最も合計特殊出生率が高い自治体である。人口が増加する要因として、県立がんセンターの誘致があった。医師等の所得階層の高い住民が増え、まちのイメージとグレードも合わせて上がっていったようだ。住民の要望も高度化、多様化し、役場はそれに対応しながら、様々な施策の充実を図っていった。

また、東京までの所要時間も短く、これも町のイメージ作りに寄与している。平坦な土地と交通の利便性、買い物する場所も充実しており、住み易そうだと感じさせる“まち”となっている。

積極的な広報も戦略的に展開されていて、首都圏からの転入者獲得を目指している。「押し」を絞って、動画を多用したPRも参考になる。

エ) 静岡県沼津市役所

日時：平成28年11月29日（火）

担当：勝亦彩、徳井瑞紀

調査の知見や感想など：

沼津市は、結婚支援による婚姻率向上と市の魅力発信に力を入れている。

民間ではなく、企画課が積極的に婚活を行っている。行政が婚活イベントを主催することで、参加者は安心して参加できるとのことで、特に女性の応募が多い。イベントの内容は、沼津港で沼津の食を堪能しながら出会いの場を提供するなど、楽しみながら沼津市の良さを実感してもらうようになっている。

市公認の婚活サポーター「縁結び隊」の14名が、ボランティアとして「世話好きおじさん、おばさん」として、男女の仲をとりもっている。

婚姻届もオリジナルなものが15種類あり、インターネットを通じてダウンロードもでき、婚姻届提出件数の8割ほどが市独自の婚姻届用紙を利用している。また、婚姻届を提出した際に希望者には、「婚姻届提出記念シート」として、婚姻届の写しと2人の写真をセットで配付している。

また、定住を促進するため、沼津市の魅力発信を目的とした「H I N A P (ハイナップ)」がある。宣伝広報が苦手な行政に代わって、地元高校生が若い世代の力によって、沼津市の情報発信、魅力のPRに努め、沼津市の良さを多くの人に知ってもらおうとしている。

出産を促すだけでなく、若者の意識改革を通じた婚姻率向上や晩婚化抑制が少子化対策には必要であり、長期的には移住、定住を狙った対策も必要である。

オ) 静岡県藤枝市役所

日 時：平成28年12月2日（金）

担 当：柳田千尋、山崎真理子

調査の知見や感想など：

県内で最も大々的に小規模保育事業を実施しており、機動性を活かした子育て支援策であるとの印象を受けた。利用者の選択肢が増えるので、今後、どのように成果が表れてくるのか、注視する必要がある。

小規模保育事業の実施には、施設開所の数年前から事業者と市役所の間で、緻密な話し合いが行われ、市役所と事業者との円滑な連携が背景にあり成り立っていることが分かった。

現在、健康寿命に繋がるマイレージはあるが、今後充実される予定である「子育てマイレージ」では、夫の育児参加について取り上げられるので、男性の育児参加がどの程度進むのか注目したい。

若者、特にこれから子育てをする世代に対する施設や制度の充実を進めており、他の市町に比べ住みやすい“まち”としてのイメージ造りを進めていた。しかし、公共交通（バス）が通っている地域が限定している点は、利便性に欠けるため、今後の検討課題といえる。

カ) 静岡県静岡市役所

日 時：平成28年12月12日（月）

担 当：柳田千尋

調査の知見や感想など：

組織が大きく、少子化対策や人口減少対策は、多くの所管が担当しているが、静岡市の最も大きな課題は待機児童対策であった。年度途中で発生する保育需要に対応するため、一時的に子どもを預かる施設を設置していた。公立保育所等を認定こども園に移行させ、柔軟な子どもの受け入れを図っていたが、施設の有効利用の点から参考にするべきと考える。

また最近、婚活事業を積極的に実施しており、NPOとの連携も行っていった。

男女の出会いの場を設け、結婚、その次にある出産につなげようとするものである。どの程度効果があがっているのか、検証する必要性を感じた。

④ 県外他自治体の事例調査（電話による聞き取り調査）

ア) 神奈川県横浜市役所

生まれる前から乳幼児期までの一貫した支援の充実として、妊娠・出産に関する正しい知識の普及啓発、妊娠・出産に関する相談体制の整備、安心・安全な妊娠・出産に向けた産科医療及び小児医療の充実、親子が地域で孤立せずに安心して育児ができる支援及び産前産後のケア（産後うつの早期発見、早期支援）に取り組んでいるが、一貫した事業展開は、他の自治体も参考にすべきものである。

また、乳幼児期の保育・教育と学齢期までの切れ目のない支援として、質の高い乳幼児期の保育・教育基盤の確保、多様な「保育・教育」ニーズへの対応と充実、放課後の居場所の充実、人材の確保、定着、育成及び質の維持・向上にも傾注している。

イ) 兵庫県

自治体や地域団体・大学・医療関係・企業等が連携して、結婚・妊娠・出産・育児のそれぞれのライフステージに応じた施策をおこなう「切れ目のない支援」を展開している。

具体的な事業として、子育て支援のスタッフに対して結婚から子育て支援までの体系的なプログラムの作成と研修の実施、テレビを用いた結婚啓発や育児に対しての情報提供、子育て支援団体の交流を通じて新たなネットワークの構築などに取り組んでいる。

「切れ目のない支援」は、縦割りが押搦される自治体にあって、関係する所管部署が連携、協働する必要があると、どの程度実効性のあるものとなっているのか検証がする必要がある。

⑤ 大学生を対象としたアンケート調査

【調 査 日】2017年1月10日（火）～2017年1月31日（火）

【対 象 者】静岡県内の大学の在学生

【回 答 者】212名（女性：96名 男性：116名）

【分析結果】次節参照

3 分析、課題等（事業実施により明らかになったこと）

セミナー、ワークショップの開催により、若者がライフデザインを考える際に重視すべき点、若者が働き、定住し、子育てする場所として重視している事柄などが明確になってきた。

白河桃子氏のセミナーからは、女性が働くことは当たり前、男性が家事や育児をすることは当たり前となる「ジェンダーの変更」に早く気付くことが重要であるとの示唆を受けた。現実の社会でも、無業の妻の家庭（いわゆる専業主婦家庭）よりも夫婦ともに有業の家庭（いわゆる共働き家庭）の方が多くなっている。この流れは、昨今の経済情勢からすれば、今後も継続すると考えられるので、すべてを否定するわけではないが、性別役割分担の固定意識を捨て去る努力が必要である。

また、世の中には、各自のロールモデルとなる人物が居るはずであり、早くそのような人物を探す努力をすべきであると講演された。そのためにも、学生時代から対人コミュニケーション能力を磨き、多くの人との交流を心がけるべきと考える。

自分の持つ特性や能力を核として、その周りや接点を持つもの、共通するものにも視野を広げ、自己啓発を進め、自分に磨きをかけることが重要であり、それがキャリア形成にも繋がっていくこともセミナーを通して理解できた。

次に、ワークショップでは、理想の“まち”の具体像を話し合ったため、若者は様々な価値観を持っていることが、改めて分かった。生活の利便性の必要性を熱弁する者、地域社会の関係や人間関係を強調する者、文化やスポーツを主張する者など、ダイバーシティな“まち”像となった。

各グループに共通していたこととして、家族を養っているに十分な仕事があること、仕事と住居が近いこと、身近に買い物ができる場所があること、出かけた先で子どもを対象とした設備があること、道路整備が行き届いていること、自然と都市が上手く融合していること、地域社会が暖かいことなどが挙げられる。

さらに、大学生を対象としたアンケート調査から、若者の結婚、出産に関する意識、仕事に関する考え方などが明らかになってきた。

- ① ライフデザインについて考えたことがある者は65%、8%が全く考えたことがない。
- ② 人生において、重要だと考えるライフイベントで最も多い回答は「就職」で、次いで「結婚」「出産」が多くなっている。
- ③ ライフデザインを考えるための情報については、58%が「あればよい」と回答し、「少しあればよい」と回答した30%と合わせると約9割の大学生が、ライフデザインを考える情報を欲している。
- ④ ライフデザインを考える情報を得るための機会としては、「大学の講義」「大学主催の講演会」「親との会話」を望んでおり、大学の役割が期待される。

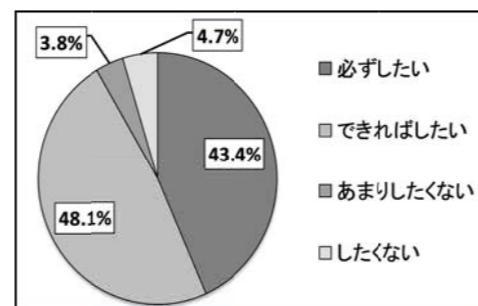
⑤ 結婚感

「必ずしたい」「できればしたい」を合わせると91.5%が結婚したいと回答している。

しかし、約5%は「結婚したくない」と回答している。

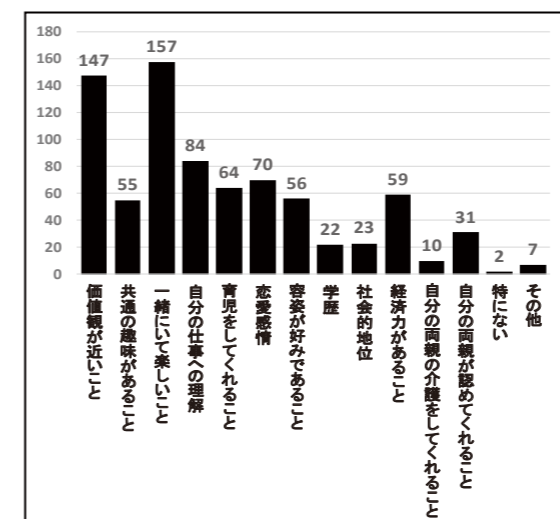
結婚について「必ずしたい」「できればしたい」と答えた者について、結婚相手に望むことは、「一緒にいて楽しいこと」「価値観が近いこと」が多い。一方で、結婚に不安なこととして、「配偶者と不仲になること」「経済的に苦しくなること」「自分の自由な時間があるか」といった回答が多くなっている（次頁参照）。

結婚したくないと思う要因としては、「ストレスが増える」「一人の方が楽」「経済的に負担が大きくなる」「自分の時間を大切にしたい」という回答が多い（次頁参照）。

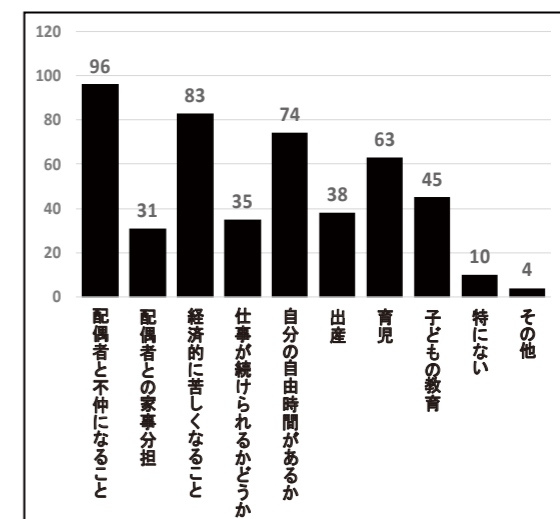


⑥ 出産感

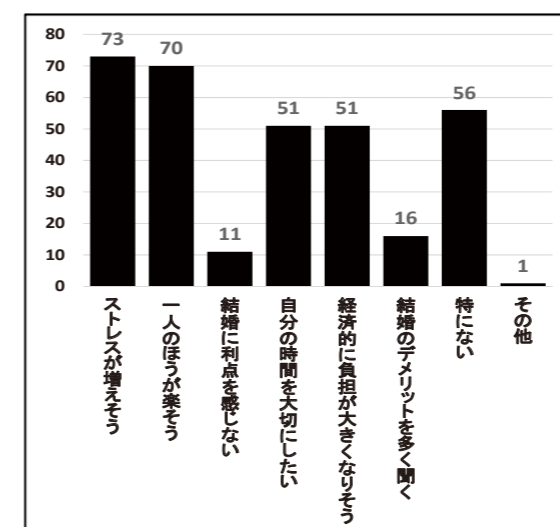
子どもについては、「持ちたい」「できれば持ちたい」を合わせると84.9%が子どもを持ちたいと回答している。同じ率を男女別で見ると、女性が87.5%、男性82.8%となっており、4.7ポイント女性が上回っている。



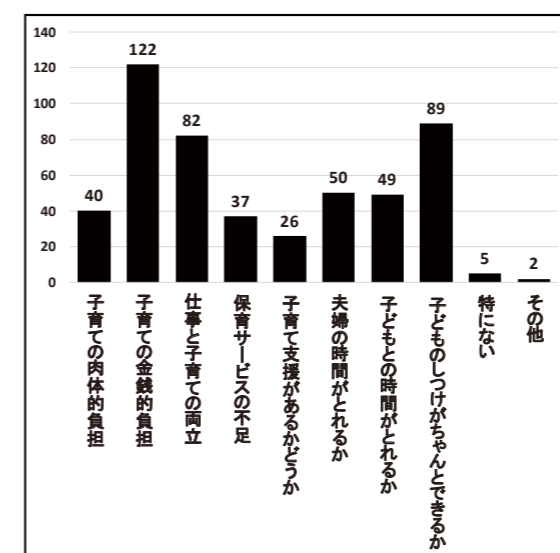
<結婚相手に望むこと>



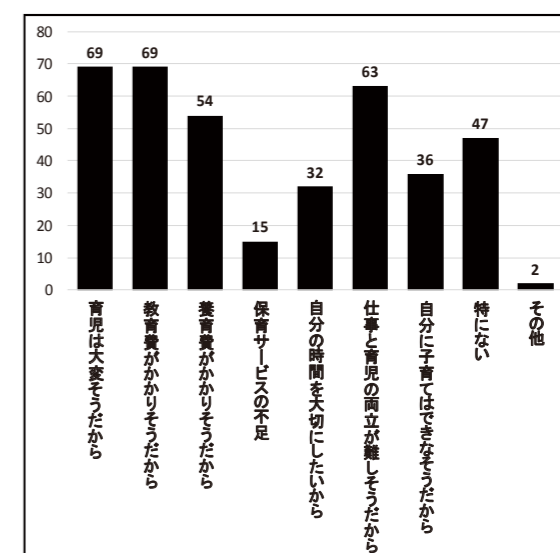
<結婚するの不安なこと>



<結婚したくない要因>



<子育てにおける不安なこと>



<子どもを持ちたくない要因>

子どもを「持ちたい」「できれば持ちたい」と回答した者について、何歳頃に子どもを持ちたいかという問いに対して、20歳代後半が最も多く59.4%、次いで、30歳代前半35.0%となっている。

子どもを「持ちたい」「できれば持ちたい」と回答した者について、希望する子どもの人数を聞くと、2人が最も多く75.6%、次いで3人が18.3%となっている。

子どもを「持ちたい」「できれば持ちたい」と回答した者について、子育てにおいて不安なことは何かという問いには、「金銭的負担」が最も多く、次いで「子どものしつけ」「仕事と子育ての両立」となっている（前頁参照）。

全員に「子どもを持ちたくなくなる要因」を聞くと、「教育費が大変」「育児は大変」「仕事と育児の両立が難しい」「養育費がかかる」が多くなっている（前頁参照）。

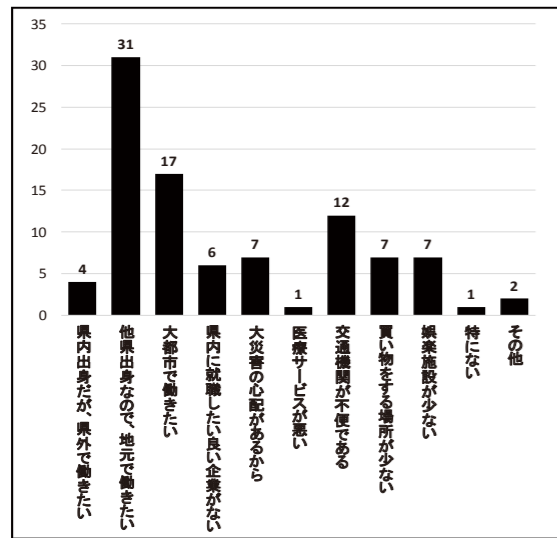
「何があったら子どもを持ってもよいか」という『子供を持つための必要条件』を聞くと、「職場の産休・育休の制度」「教育費への補助」「妊娠・出産に伴う医療費への補助」「幼稚園・保育所の充実」「職場の出産・育児への理解」が多くなっている。

⑦ 仕事の場所

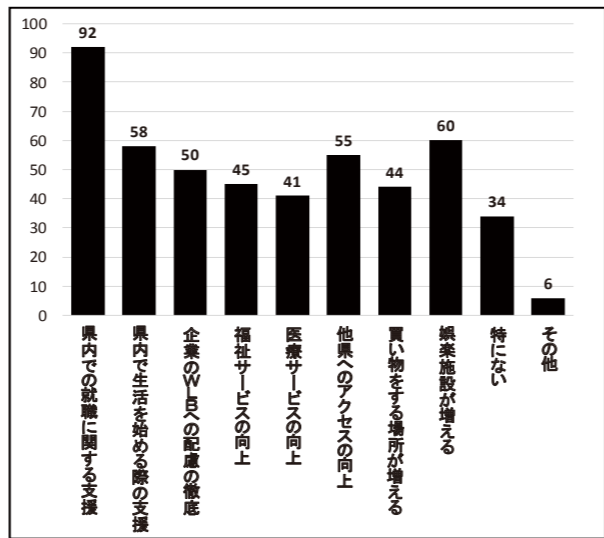
「静岡県内で就職したいか」という問いには、「県内で就職したい」31.1%、「県内で就職してもよい」39.6%となっており、合わせると70.7%が県内での就職を考えている。しかし、約27%は、県内での就職に対して前向きではない。

「あまり県内で就職したくない」「県内で就職したくない」と答えた者について、その理由を聞くと、「他県出身のため、地元で働く」が最も多く、次いで「大都市で働きたい」「交通機関が不便である」が多くなっている。

全員に「静岡県内で就職するには何があったらよいか」という『県内で就職するための必要条件』を聞くと、「県内での就職に関する支援」が突出して多く、次いで「娯楽施設が増える」「県内で生活を始める際の支援」「他県へのアクセスの向上」が多くなっている。



＜県内で就職したくない理由＞



＜県内で就職するために必要なもの＞

4 政策提言（自治体への事業提案）

私たちのチームは、セミナー、ワークショップ、自治体の調査、大学生へのアンケート調査などから、静岡県が平成28年2月に発表した「ふじのくに少子化突破戦略の羅針盤」において出生率に影響を与えるとした6つの地域力向上に資する提言として、各地域が取り組むべきものを「施設」「催し」「政策」「その他」の4つの視点で取りまとめた。

政策提言の主流にある基本的な理念は、「豊かな生活と豊かな地域社会」である。誰もが個人として尊重され、安心して暮らし、働き、子どもを育て、希望を叶えることができるような社会の実現が目的となる。

私たちの今回の取組で検討した“夢のまち”が兼ね備える具体的な内容を6つの地域力と4つの視点のマトリックスで示す。

地域力	施設	催し	政策	その他
地域の働く力	・職業斡旋所 ・技能訓練所	・企業の現状紹介メッセ ・技能オリンピック	・育児休暇代替員補充支援 ・扶養支援の充実 ・企業誘致に向けた優遇制度	・産官学連携 ・新産業創造 ・6次産業支援 ・役所の開庁時間見直し
地域のにぎわい力	・ショッピングモール ・IR	・シャッター絵画展 ・聖地認定と巡礼ツアー ・自然体験	・ご当地婚活届	・街灯（各家庭で点灯） ・レンタサイクル ・公共Wi-Fi ・自治体広報 ・人権教育（道徳教育）
乳幼児サポート力	・プレイパーク（遊園地） ・公園 ・総合病院	・子育てアイデア展（表彰）	・子育て目的税 ・ベビーシッター派遣、斡旋 ・保育士確保（給与水準の引上げ）	・広いエレベーター ・おむつの自動販売機
子育て基盤力	・児童福祉施設と高齢者福祉施設の複合化 ・駐車場 ・こども園 ・放課後児童クラブ		・中高生の子育て体験 ・ひとり親家庭支援の充実	・小学校区内に複数の支援者
夫婦の協働力	・こども園	・婚活イベント ・ベストカップルコンクール	・多子家庭優遇制度	・イクメン削除
家族・地域の絆力		・高齢者の活躍促進 ・祭り	・子育てマイスター認定 ・子育て応援隊創設	・地域貢献マイレージ

上記の各取組以外にも、「若者を対象にしたライフデザインに関する官学連携での啓発」「若いうちから子育てに対する不安を払拭する取組」「切れ目のない事業展開」が望まれる。ここでの「切れ目のない」とは、支援の対象者にとって切れ目がないだけでなく、取組そのものも単年度や数年で終了するのではなく、事業成果の検証と必要に応じて内容の見直しも行いながら、中長期的な事業の継続も意味するものである。

また、各事業を着実に推進していくためには、自治体での推進体制の整備も必要となる。組織横断的な取組となるため、総務、企画部門に専任の担当部署を配置し、予算と権限を付与して、役所内外をコーディネートしていく必要がある。



最後に、私たちは今回の静岡県からの委託事業に参加し、多くの事を学び、知りました。結婚、出産に関して、様々な見方や考え方があること、自治体を訪問して各自治体が多くのことを行っていることなど、知らなかったことを知ることができ、視野が広がりました。

このような機会を与えてくださった、静岡県の担当部署の方々に感謝申し上げます。また、ヒアリング調査、電話調査で丁寧に対応いただいた自治体の方々、アンケート調査においてご協力くださった多くの皆様方に対して、記して深く感謝申し上げます。

A large area of the page containing horizontal dashed lines, intended for handwritten notes or a report.



Shizuoka Prefecture

大学生が創る未来への羅針盤 政策提言

静岡県健康福祉部こども未来局こども未来課

〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町9番6号

TEL 054-221-2608 FAX 054-221-3521

大学生が思い描く未来予想図事業